

平成二十九年 度

證大寺職員報恩講

平成二十九年 度 證大寺職員報恩講

サ ン ガ 建 立 と 歎 異 の 精 神

法 話 三 明 智 彰 師

宗 教 法 人 證 大 寺

〒134-0003 東 京 都 江 戸 川 区 春 江 町 4-23-1

TEL03-3653-4499 (代) FAX03-3653-2250

<http://www.shoudaiji.or.jp>

### 【證大寺 三つの願い】

- 一、弥陀の本願に基づき證大寺は、「生涯聞法」を実践しています。
- 一、弥陀の本願に基づき證大寺は、参詣者の皆さまの願いを聞き取ります。
- 一、弥陀の本願に基づき證大寺は、どなたでも集える共通の広場をつくります。

### 【證大寺の事業目的】

感謝と尊敬にあふれた自分に目覚める

### 【證大寺の使命】

- 一、生涯聞法を通して、  
葬儀・法事・お参りの意義を確かめ、お念仏のある生活を回復します。
- 一、生涯聞法を通して、  
地縁血縁を超えた、どなたでも集える共通の広場をつくります。



平成29年度 第3回證大寺職員報恩講  
パートナー一同（於 江戸川本堂）

三歸依文

人身受け難し、いまずでに受く。仏法聞き難し、いまずでに聞く。

この身今生において度せずんば、さらにいづれの生においてか

この身を度せん。大衆もろともに、至心に三宝に歸依し奉るべし。

自ら仏に歸依したてまつる。まさに願わくは衆生とともに、

大道を体解して、無上意を發さん。

自ら法に歸依したてまつる。まさに願わくは衆生とともに、

深く経藏に入りて、智慧海のごとくならん。

自ら僧に歸依したてまつる。まさに願わくは衆生とともに、

大衆を統理して、一切無碍ならん。

無上甚深微妙の法は、百千万劫にも遭遇うこと難し。我いま見聞し

受持することを得たり。願わくは如来の眞實義を解したてまつらん。

# 目次

巻頭のことば	1
当日の日程	3
住職挨拶	4
職員感話	6
職員感話	19
法話Ⅰ	37
職員感話	55
法話Ⅱ	67
職員感話	95
法話Ⅲ	109
班座談発表	125
法話Ⅳ	139
大坊守挨拶	151
おわりに	153

## 巻頭のことば

證大寺では、確かに毎朝のお勤めを開催し職員、ご門徒と共に勤行・感話・法話を行なっている。また各現場で報恩講も開催している。しかしそれも慣れると形式化してしまい、自分に向き合う自身の朝勤行、私のための報恩講となることは稀である。

仕事の意義を確かめることなく日々の仕事を行うことは、実は自分の人生に対してすまないことである。加えて證大寺は、仏教を公開し、生まれた意義と生きる喜びを見つける場所として再興された場所である。

昨年は中興の祖、学海上人が浄土真宗の学場として證大寺を再興してから四〇〇年目の職員報恩講であった。大きな節目に当たり、證大寺再興の願いに向き合い、これからの進む道を明確に示したいと願いながら、何をどのようにすればいいのか具体的な内容を明確にできないまま歳月が過ぎていった。

そのような中で、講師の三明智彰先生より、寺院の建立は木材などの材料ではなく、弥陀の本願によって立ち上がった人々の願いと力により建立されたとの仰せを受けた。

さまざまな背景を持つ人々が、證大寺という寺院に集ったことは、自分の選びを超えた不思議な仏縁に他ならない。自分のための報恩講を勤め、仕事の意義を学ぶことを通して感謝と尊敬にあふ

れた自分に目覚める。そして「生まれた意義と生きる喜びを見つける」ことを願っている。この報恩講の冊子を大切にしておいて各現場で聴聞を続けてまいりたい。

證大寺 住職 井上城治

## 当日の日程

- 日時 平成29年10月25日
- 場所 證大寺 本坊（江戸川区春江町4-23-1）
- 対象 證大寺パートナー 計53名

### ■スケジュール

開始	終了	時間	項目
8:30	～ 9:00	30分	お朝事
9:00	～ 9:15	15分	集合・準備
9:15	～ 10:00	45分	報恩講勤行
10:00	～ 10:05	5分	住職挨拶
10:05	～ 10:45	40分	職員感話
10:45	～ 11:00	15分	休憩
11:00	～ 11:20	20分	職員感話
11:20	～ 12:05	45分	三明先生法話Ⅰ
12:05	～ 12:50	45分	昼食
12:50	～ 13:10	20分	職員感話
13:10	～ 13:55	45分	三明先生法話Ⅱ
13:55	～ 14:05	10分	休憩
14:05	～ 14:25	20分	職員感話
14:25	～ 15:10	45分	三明先生法話Ⅲ
15:10	～ 15:20	10分	休憩
15:20	～ 15:50	30分	班座談
15:50	～ 16:00	10分	休憩
16:00	～ 16:35	35分	班座談発表
16:35	～ 17:15	40分	法話Ⅳ
17:15	～ 17:20	5分	大坊守挨拶
17:20	～ 17:25	5分	住職挨拶
17:25	～ 17:30	5分	恩徳讃、散会

## 任職挨拶

みなさん、おはようございます。本日は證大寺 職員報恩講です。三明先生には福岡から早朝よりお越しいただき、勤行にもお出ましいただき有難うございます。みなさんもそれぞれの現場から、またご自宅から、朝早い中をご参集いただき有難うございます。

ただいま、報恩講の勤行が勤まりましたが、普段各現場で務められている朝のお勤めとはだいぶ違うんじゃないでしょうか。お彼岸やお盆などの法要と比べても、報恩講の勤行の方が丁寧で時間がかかります。また声の張り上げ方も異なります。これはこのように声を張り上げてお勤めをするように伝えられてきた伝統があるのです。ということは、私たちの親先祖は声を張り上げるような気持ちで、いまいただいている教えを受けとめてこられたということです。そして、これまでにこの報恩講のお勤めが簡略されずに伝わってきたことは、今の私に対して、この大事な教えを一言一句ゆるがせにせずにつかり聞くようにとの親先祖の願いがかけられているのです。

報恩講は親鸞聖人がお亡くなりになってから七五〇年以上、一度も欠かさずに勤められてきました。鹿児島では江戸時代を通して明治九年まで徹底した念仏弾圧がありましたが、その中でも報恩講は欠かさずに勤められてきました。ご本山の報恩講では坂東曲（ばんどうぶし）と言いまして、全身を揺すり声の限りを張り上げて正信偈、念仏、和讃を読経します。これはどういうことか。私

は「井上聴け」と。父でしたら「城治聴け」ですね。普段とは異なり、年に一度のこの報恩講だけはこの読み方を通して、この一日だけは本当に自分に何が大切なのかを聴けと呼びかけられています。私には父、さらには先輩方、さらには報恩講を伝えてきた親先祖から、「大事だから報恩講に身を据えて聴け」という命令を受けている感じがあります。

今日報恩講で読んだご和讃の中に「五濁悪世の有情の 選択本願信ずれば」という言葉がありました。「五濁悪世の有情」とは、五つの濁りがある悪い世の中とありますが、これは自分抜きの評価ではありません。日頃の生活の様子を見れば私自身のことです。この私を選んで阿弥陀如来は本願を起こされたのだと私は聴いています。長谷川耕作先生から、このお念仏の教えほど豪勢なものはないのだと教えていただきました。評価を気にして誤魔化すのではなく、自分が自分として生きていく道があるのだ、本当の根拠が与えられるのだと。それは弥陀の本願を聴き、自分の人生を大切にせよという願いです。そしてそれは同じように全ての人が弥陀の本願をかけられた尊い存在だということです。自分の人生を大切にしていくなかで道を確認する日として、この報恩講が、自分のための報恩講があります。今日の報恩講は「サンガ建立と歎異精神」という講題が与えられています。自分のこととして聴いてまいります。本日はどうぞ宜しくお願い致します。

## 職員感話

教化伝導室 室長 松田大空

おはようございます。本日の職員報恩講の意義を今、住職がはっきり言つて下さいました。とにかく聞けと。親先祖の「聞け」というこの叫び、命令だと。私達は、これを今ここに、今日の一日に与えられたのだと。この事一点をもつて今日は一日みんなそれぞれこの「聞け」という親先祖の叫びと一緒に聞かせてもらいたいなと思つております。今この職員報恩講は正信偈真四句目下、五洵の念仏和讃ご回向のお勤めで始めました。この後、パートナーそれぞれの感話、先生よりご法話を賜り、そして皆さんと座談をし、発表もする。そして最後に恩徳讃をうたう。恩徳讃を斉唱してやれやれ終わりかというような、そんな恩徳讃はうたいたくないなと私は思つております。

「如来大悲の恩徳は身を粉にしても報ずべし 師主知識の恩徳もほねをくだきても謝すべし」。報謝すべし恩徳とは何か。如来大悲、師主知識です。今日は報恩講でありますからね。恩に報いる集まりですよ。恩徳に報謝する集まりですね。如来大悲、師主知識の恩徳に気付かなければ恩徳に報謝するという事が分からないですよ。如来大悲、師主知識からの「聞け」という声、「お前は間違えとる」だから「聞け」という叫び。こういったところをしっかりと如来大悲、師主知識の恩徳としてここに頂いた時に、はじめて「身を粉にしても報ずべし」という心がおこってくるのだと思

ます。この「べし」というのは三明先生から、「そうせずにはおれない心」だと教えて頂きました。師主知識の恩徳も骨を砕いても謝せずにはおれないというね、こんな最後の立ち上がりの恩徳讃として今日一日の最後の恩徳讃を、そのような気持ちで迎えたいなど、そのように願っております。かつて任職から、恩徳讃を力一杯うたえるような、そんな人生を歩みたいというような事をお聞きしたことがあります。私もその通りだと思っただけです。今日は自分自身が恩徳讃をうたう時に、ああ、そうなってないな、違ってるな、間違ってるな、本当に力一杯うたえてるだろうか、こんなところを自分自身で問うていきながら今日一日を皆さんと一緒に聞法させて頂きたいと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

**船橋昭和浄苑 浄苑長 溝邊貴彦**

はい、皆さんおはようございます。先日ですね、全体朝礼で私の方から少しお話をさせて頂きました。この報恩講、年に一度のですね、法要にあたりましてどういう意味があるのか、また、私ご自分の人生において證大寺にいてですね、ここに立って何を願われて、また自分自身が何を願ってこれから進んで行くのかという事ですね。そういう事を少しお話をさせて頂いたんですけれども。私は今、私がこの證大寺でこの三十代という十年間を費やしてですね、思う事はやはり今後自分の人生の目標、それからこれから今後、私が田舎のお寺に帰る事があると思うんですけれども、その時

に自分がどういいうお寺を、お寺の意味ですね、そこに存在する意味をちゃんと自分に落としていけるかという事を、こういうものをここの證大寺で目指してやっている事とイコールだという事だと思えます、自分自身ですね。これは私の出生本懐に繋がっていく道だと思っています。

そして、この報恩講という事は、日々そういうような事を思っていられれば、いいんですけど、本当は生活の事とか家族の事とか仕事の事とか、そういった内容の中に流されていってしまった、自分の我というものに埋没してしまっただけでなくなってしまうのが私なんです。やっぱりそれはどうしても自分ではどうする事もできないんで、教えてもらって自分の立場を確認して、確認させてもらって、そして都度、都度こう軌道修正しているというか、自分が本当に「お前、本当にそれか」という風な事を教えてもらわないとやっぱり私は駄目なんです。

報恩講というのはこの教えられるという事が一番私にとっては大事です。「本当にお前、その人生なのか」という事ですね。「本当にそれで僧侶なのか」と、そういう風な事を一つひとつ確認させて頂くと、そういう大事な時間と場所というのが報恩講を頂くという事だと思います。これは私もそうですし、皆さんも一人ひとりがそうだと思うんですね。一人ひとりが本当に、私は今ここにいて何を問われているのかという事を、ここの證大寺にいてどこを目指して日々、自分の大事な人生の大部分の時間を費やしているのかという事を、本気で一人ひとりが考えて、その一人ひとりが、お互いに場と時間を共有してですね、話していくというのが、これが報恩講だと僕は思っています。

これはやっぱり念仏の伝統ですね、そういう場所と時間を我々の親とか先祖とかそういう方々が創られて、伝統してこられた事、これにすごく尽きると思います。是非今日はですね、この場を大事にして皆さんと一緒に今一度ですね、自分自身を見つめ直させてもらって共有していきたいなと、こういう風に思っております。本日は一日よろしくお願いいたします。

### 業績推進室 室長 船井隆作

船井です、おはようございます。報恩講にあたりまして、證大寺で働く意義って何だろうかって改めて考えさせてもらいました。結論としては證大寺というのは今、自分を見つめ直す、自分が今何のために何をするのが大切なのかなって事を改めて見つめ直したり、そのための深い気付きを得たりする、そういう機会がたくさんある非常に稀有な場所、意義深い場所だという事が私の中には最終的な答えになりました。

今自分にとって人がどういう事に向き合って、何を大切にして生きていくのかっていう事を、考える事が、実は物であったりサービスに溢れてね、非常に便利になった今の日本に、世の中に、私、一番大切な事だと思ふんですね。今、社会に何が足りないのかと言われれば多分、この今生きている事の意味を問い返す事。その事について自分が深い気付きを得る事。これが今、日本社会に一番不足している事だと思います。そういう意味では今、社会に本当に必要な、真に必要なものを提供

する、提案する、そういうものを広めるお役目を頂いているんだという風に考えたのが、実は私の考えた結論なんです。

実はこの答えに至るまでには少し時間がかかりました。最初に働く事の意義って自分で自問自答しまして最初に思い浮かんだのはですね、お金を稼ぐためというのが率直なところ、すぐ頭に浮かびました。もし同じ質問を問いかけたら皆様、多くの方、そういう風に思い浮かぶんじゃないですかね。ただ、お金を稼ぐためだという風に思い浮かんで、同時にすぐ違和感も感じたんですね。その違和感で何だったんだろうかなというところを少しご説明したいと思います。

私、お寺にご縁を頂くまではですね、長らく外資系の企業で営業をしておりました。外資系の企業というのは新卒の採用ってしないんですよ。新卒ではなくて即戦力のスキルのある人を中途採用するというのが外資系の在り方です。なので、外資系に来る人というのは皆さん自分のスキル、能力に自信のあるプロ意識の高い方々でして、そういう意味ではその集まりというのは、ある意味、傭兵のような、雇われた兵隊ですね。傭兵の集団のような、そういった性格があります。雇われの傭兵の集団ですから当然、皆さん自分の腕に自信はあるんですけれども、当然働く意味は、目的はお金を稼ぐ事なんです。なので、どこか別のところで自分の能力、スキル、腕を高く買ってくれるところがあれば、それはもう速やかにそちらに転職するんです。外資系において同僚達が数年でライバルの企業に転職するというのは別に珍しくも何ともない。普段からよくある風景だったんです。

ね。

ただ、その場所においてすごく違和感があったというのは私、実際のところだったんです。どうしてかなと言いますと、営業として当然、自社のサービスマンなり製品なりをご提案して歩きます。今、私とそのA社にいる時は「私の所属しておりますA社の製品はとても良い商品です。どうぞご採用下さい」って提案して、で、転職して変わったら「いや、今度B社に所属する事になりましたが、B社の製品こそが最高でございます。どうぞお求め下さい」と。こういう風にくるっと切り替えられる人達というのがどうにもですね、胡散臭いなと思ったんですね。お給料の高さで自分のお勧めするものが真逆に変えられるというのは、何かちよつと違うなど。本当に人に提案しよう、例えば自分の家族や友人にお勧めしようと思ったら、自分で納得して「これなら間違いない、これは本当にいいものだ」と思うものをきつと友人だったり家族だったり、あるいは先生だったりご紹介すると思うんです。それってそういうお給料を頂いたからお勧めするということ、そんな話ではないと思うんですね。ここが私、お金を元に働いているという人達に感じた、少し違和感でありました。

働くっていう事は何でしょうか。働くというのは結構人生の大部分の時間を使います。そういう意味では働くというのは時間を消費する事だとも言えると思うんですが、我々の命、有限です。限りがあります。という事は、働くという事は時間を消費すると思えるのではなくて、命を消費するという風に考えてもいいと思うんですね。自分の命を削って、自分の命を消化して、それで偽りの

ためにお金を稼ぐというのは、これはちよつと生き方としては非常に虚しいんじゃないかと思ひます。

私には、先月、先週六歳になった娘がおります。もう六歳になると随分言葉が達者でしてね、どきつとするような質問もするんです。ついこの前などは「パパ、パパって恋つてした事ある？」と聞かれまして、どう答えたものかと一瞬躊躇したんですが、まあそんな事も言うんですけれども。まあここまで来たらですね、多分もう遠からず「パパは何で働いてるの？」って聞くと思うんです。「パパは何で證大寺で働いてるの？」って絶対聞きます。今晚聞いてもおかしくない。その時にです。ね「いや、パパはね、お金の稼ぐために仕方なく働いてるんだよ」って言っちゃったとしたら、これは私に、娘も将来、人生に大変な禍根、災いを残しちゃうと思うんです。こんな事を言うわけにいかない。だからどう六歳の子に伝えたらいいかって結局、今回の證大寺で働く意義という質問はどうやったらスカッと娘に答えられるかなど、これ大変難しいです。結局、今娘に答えられたら何て答えるかと言うと「パパは今本当に世の中に必要な、自分を見つめ直して深い気付きを得られる、そういう機会、そういう場、それを広めるためのお仕事をしているんだよ」と今、答えようと思ってるんですね。今の私の言葉の力じゃこれが精一杯。多分、六歳の娘、分からんと思うんですよ。言ってる意味が。ただ、働く事、證大寺で働いているという事に何かしらの尊い事が含まれているなっていう事は感じてもらえるんじゃないかと思うんですね。まずはそこまで感じてもらえれば、

まずはいいのかなと思ひまして、そういったちよつと考察をした次第でした。

今日は報恩講です。今、私はそのレベルの言葉でしか伝えられないなと思つたんですけれども、改めてお話を聞く中で色々新しい言葉、新しい気付きを通して深めていければなと思います。本日は私も報恩講で精一杯お話を聞いて、気付きを深めて参りたいと思います。皆様どうぞよろしくお願ひいたします。

### 業務推進室 室長 小松久泰

おはようございます。普段は江戸川の方で勤めています小松と申します。感話をさせて頂きます。先ほど大空僧侶から教えて頂きましたが、報恩講とは恩に報いる集い、つまりいただいたその恵みにお返しをするっていう事だと思ふんですが、では普段、自分自身がどうかと考えると自分にとっての良い悪いっていう事だけで自分の都合だけしか判断していない、普段の自分はなかなかそういう恩を知る機会というのはないのかなと思います。そう考えるとこのような機会が、改めて自分自身を省みる機会になるのではと思つています。

では何故そういった報恩講とか、普段のお参りとかもそうだと思ふんですけれども、続いてきたのかなって考えると、これもまた教えてもらった事ではあります。そういったお参りを通して自分自身、人生をより良く生きるために、親先祖、あるいは親鸞聖人が伝えてきた事、願つてきた事

を聞く事なんだという事です。

それでは自分自身の人生をより良く生きるというのはどういう事なのかなって考えると、先日のお話では自分自身の人生をより良く生きるというのにはどうも、先日の全パートナー朝礼で、お話があったかと思うんですけども、オーナーシップというキーワードで話をされていましたが、自分の人生に主体的に関わっていくことだと思います。そう考えると、あその主体的に、自分の人生を主体的に生きるというのはどういう事なのかなと考える必要があります。私自身、普段どうなのかと振り返ると、これもまた教えてもらった事ですが、普段の自分というものはどうしても人に依存してしまったりとか、色々な事象や物のせいになってしまうことがあります。依存、他責には六つあって、内向きみたいな表現をされます。一つには環境依存。例えば今日だと天気が悪くて雨が降ったからとか、天気のせいにしてみたりとか。あとは完璧依存。相手に完璧を求めてしまって、自分ができないのは相手ができないからと自分以外に原因を求めてしまう事。そして、他人意思依存。これは他人が言った事にそのまま同調してしまって、自分の考へがないこと。あとは他者評価依存。これは誰かに評価される事、そのために頑張ること。そして、正当化他責って言って、自分は正しいんだけどこの人がっていう責任転嫁をしてしまうと。あと事情他責。こんな事情がありました、ちょっと出来ませんでしたというように。

何か、普段の自分というのは正にこれが当てはまってしまう事があって、自分の人生なのに本当に他人に依存したりとか、あるいは他人に決めてもらったりとか。こう何か言い訳をしたりとか。

そうではなくて、自分の人生は自分自身が決めるものなんだって。なのでそれが例え自分一人になったとしてもやり遂げるんだ、そういった在り方ですね。そういったものを今回、職員報恩講という事で親鸞聖人の在り方あるいは親先祖がこれまで続けてきた在り方とかそういうところから改めて自分自身を顧みる機会にしたいと思っております。今日は感話のテーマが「なぜ證大寺で私が働くのか」という事ですけれども、それを自分自身考えてみると、やはり證大寺の理念や成したい世界、そういうものを実現するっていうところと、自分の人生がより良い人生、「ああ良かったな、生きてて良かったな」って思える事がイコール、つまり同じではないかと感じてるからだと私は思いました。今日はまた皆さんの感話と三明先生のご法話を聴聞し、またそういうところを改めて確かめていきたいなと思っております。よろしくお願いいたします。

### 執行役 田村和彦

おはようございます。ただ今、執行役として紹介して頂きました。今回、この感話をずっと考えてました。ですが私ですね、答えはないんですよ、正直言いますと。ただ、今日私、ここで話すっていう事は證大寺の執行役として働く、その意味を考えようと思ったんですよ。それは田村和彦個人だとも思ってます。その執行役として證大寺で働く意味、それを考えるのが私にとっての今日の報恩講です。

ただ私、その時に思ったのは執行役の使命をです、證大寺の願いを実現する事。それこそが役割だと思えます。そのためには理念を皆さんで共有しなきゃいけませんし、当然利益も必要です。ただ、その根本にある證大寺の願い。これは何なのかと私、思ったんですよ。去年です、證大寺は中興四〇〇年の報恩講がありました。その際に私が聞かせて頂いて心に残ってるのはですね、「證大寺は浄土真宗のお寺として中興された学海聖人の願いにかえり」、そういうお話がありました。これが私、本当に未だに心に残っています。その学海聖人の願いというのは、きつと親鸞聖人の願いのままだと私思っています。

ただ、その願いというのは学海聖人だけじゃないですよ。親鸞聖人、学海聖人、歴代住職、私は会った事ないですけども先代住職、その先代住職の願いを継いだ現住職、井上住職ですね。その願いがそのまま證大寺の生涯聞法、聞法道場としての證大寺の在り方だと思っております。

證大寺の願いイコール住職の願いでなくてはいけないと私は思っております。私ね、こういう住職が一番近い立場で、じゃあ果たしてその願いに関して住職と同一であるかって言ったら申し訳ないです。決して同一じゃないです。十三年ここで勤めていて住職に正直しよっちゃう怒られます。揉めます。で、不貞腐れます。反論もします。そんな自分がね、情けないんですよ、本当の話をすると。十三年もいて全然分らないですよ、色々な事が。溝邊浄縁長から五年前くらいに言われたのは、普通の組織だったらもう田村さんとつくに首だよと。證大寺だから、お寺だから田村さん

いれるんだよと言われたんですよ。未だにそれがね、心に残っています。でもそれで、もしかしたらいいのかという部分もありますし、駄目な自分も分かるんですよ。答えはないですけど、本当に未だにその心が、この言葉が私、残っています。

ただその願いをですね、まあちよつと出来るとは言えないですけども、なるべく冷まさずにその願いそのままを自分で受けたいと思っています。それが自分自身の役割であり、自分自身のためだと思っています。

そして今日、その證大寺の願い、親鸞聖人の願い、学海聖人の願い、先代住職の願い、住職の願い、イコール證大寺の願い、どれだけ今日自分がぶれているか、気付いていないか、分かっているか、違っているか、それに気付いていけるのが今日だと思っています。

三明先生から歎異精神イコール自分が異なる事に気付く事だよ、と教えてもらいました。じゃあ果たしてそれに関して自分が異なっている事に素直に歎く事、悲しむ事が出来るか。出来てないです。そんな出来ていない事だらけですけども、その出来ていない事に気付く自分に恐れなくて今日は御本尊に向かって皆さんの感話、三明先生の法話、それを聞きたいと思っています。

私はあんまり話をするのが苦手なので、今話したマネージャー陣いますよね。私、今の話、本当にはほとんど聞いた事がないですよ、皆さんから。いつもそばにいて一緒にいるのに。もうそれ自体が情けないですよ。ただ今日はですね、そういう皆さんと一緒に真向かいになって御本尊に向か

って正直に生きる自分でありたいと思っています。今日一日、この職員報恩講、今日しかないんですよ。ですので私自身、これいかに大切に時間を過ごしたいか、過ごすか、それにかかっていると、思います。本当に今日はそういう大切な時間を頂きましてありがとうございます。以上になります。

感話テーマ

「なぜ證大寺で私が働くのか」

# 職 員 感 話

船木あき子

小原 悠

濱口 順子

大西 一彦

今井 洋子

## 職員感話

船橋昭和浄苑窓口サービスク 船木あき子

おはようございます。船橋の船木と申します。報恩講で感話をするのは実は二度目です。一度目は二年前に。その時のテーマは「自分にとつての證大寺とは」というテーマでした。今回は「なぜ證大寺で私が働くのか」というテーマですが、実は昨日ちよつと二年前の自分の感話を読み返してみ、今回のお話する内容に近い内容をお話していました。なのでお話する内容があまりいつも変わらないのかなとちよつと思っています。

私が證大寺で働くのは、お返しをしていきたいからです。證大寺に入職して、今八年目になります。入ったばかりの頃は仏教の事を私は何も知りませんでした。実は宗派がこんなにある事もほぼ知らず、浄土真宗という宗派がある事もほとんど知らないという状態の時に入職いたしました。

そんな私に、そこにいた先輩方が色々教えてくれて今の私があります。それは先輩方だけではなく、参詣者の方、門徒様、お墓持ち様、皆様から色々な事を教えて頂いたと思います。その頃は本当に法事の事、お墓の事、何も分かりませんでした。それを少しずつ覚えていく私の事を皆さんが待っていてくれて、成長を見守っていて下さった方達がたくさんいます。そんな方々に少しでもお返し出来る事をしたいという気持ちですが、今私が證大寺で働きたいという思いになっています。

本当にたくさんの方に支えられて教えて頂いたというのをつくづく感じます。

特に、門徒様やお墓持ち様に一番ありがたいという事を教えて頂いたかなと思います。

門徒様やお墓持ち様が亡くなられた時に、まずお寺に第一報が入ります。最初の頃、本当にその電話が嫌でした。本当に、昨日までお話していた方が亡くなる、その連絡をもらおう、何て悲しい職場なんだろうと思いました。ある時、毎月お参りに来られていた門徒様が亡くなりました。実は毎月いらっしやるのを少し楽しみにしていたので、すごくショックを受けたのを覚えています。その方のご自宅での枕勤めに、加藤僧侶に同行させて頂きました。ご自宅に伺って普段自分が見ていた門徒様のもっと深い部分、本棚やその方が生活していた部分に入らせて頂いて、改めて枕勤めというもの大切さを感じました。そしてそのお姿を見せて頂いたのがとても良かったと思っています。本堂で葬儀をやらない場合、窓口にはいきなりお写真とお骨が来ます。ですから、亡くなられたという話を聞いていても、その方の最期のお姿を見る事なく、遺影写真とお骨をお預かりして法事となります。しかし、その方の最期のお姿を見せて頂き、本当に穏やかなお顔を拝見できて、自分の心が落ち着いたのを覚えています。その最期のお姿を見せて下さった門徒様とご家族の皆様にとっても感謝しています。

お参りさせて頂いた時に、本当に今までありがとうございましたという風にお伝えする事ができました。そしてその時に私は今いる自分の場所を守っていききたいと感じたんだと思います。私に出

来る事を少しでもお返ししていききたい。それが私の今あるものです。私がそう感じるのは、自分の死への受け止めがすごく強いと思います。私の母は若くして亡くなりました。事故でしたので突然、朝まで元気であったのに夕方には亡くなりました。何だか分からない内に葬儀が終わり、母の顔を見た記憶も実はあまりありません。あまり仲も良くなかったので、母の葬儀の際にありがとうとは言えませんでした。何年も経って七年前に父が亡くなった時に、やっと母の死を受け入れたような気がしています。

それを、受け入れられなかったのは自分に対して素直じゃなかったからだと思いました。母に対しては「自分勝手に死んだくせに。」とずっと思っていたのです。父の葬儀の夜に妹と二人で話をし、妹も同じようになかなか素直にあの時は何も言えなかったという思いを抱えていたという事を知りました。姉妹で母の事を受け止めてられなかったねと話をしたのを覚えています。

人は死ぬ瞬間を選ぶ事は出来ません。それでも納得が出来る死に方があるはずだと思ひ込んでいました。母を許す事が出来ませんでした。私は母にごめんね、ありがとうという事が出来なかった自分を認める事が出来ずにいました。今でも素直に感謝する事は難しいと今でも感じています。

人は必ず亡くなります。その亡くなる事を避ける事は出来ない。でも、その方の思いや教えて下さった事は無くならないと思います。きっとその事も、證大寺にいなければ気付かなかった事だと思います。母の死も門徒様の死も同じように、私に本当の姿を見せてくれるという事はとても大き

い事だと思っています。亡くなられた方々から教えて頂いた事を大切にして、それを更に次の後輩達にも伝え、その方々の思いを引き継いでいく事が、私が證大寺で働いていきたいという意義です。そしてたくさんの方に支えて頂いた事を感謝して、少しでもそれをお返ししていきたいと思っています。以上です。ありがとうございました。

## 江戸川本坊 教化伝導室 小原悠

皆さんおはようございます。私、江戸川本坊で僧侶を勤めております小原です。感話をさせて頂きます、よろしくお願いいたします。

私が證大寺にお世話になるようになったのは今年の四月です。まだ半年とちよつとといったところでございます。ただですね、その中で永代供養の法要であったりお彼岸、お盆もそうですね。色々な法要も勤めさせて頂きました。また、仏教人生大学の銀座道場であったり、求道会館での講座にも参加させて頂いて。またですね、新潟の妙高の研修にも行かせて頂きました。本当に内容の濃い充実したこの半年間を今過ごさせて頂いております。まずそれに関して感謝申し上げます。本当にありがとうございます。

その中で、今回「なぜ證大寺で私が働くのか」というテーマを頂きました。なぜか、そういったところを考える上で、まず自分の原点というものを振り返ってみました。私自身は一度社会人を経

験しておりまして、作業療法士というリハビリの職に就いていたのですが、ちょっと体調不良とかもありまして続けられなくなって、その時すごく悩んだんですね。自分自身がどうやって生きたらいいんだろうかと。何をすればいいんだろうかっていったところで、本当に何も出来なくなってしまうんですね。幸い親の助言もありまして、大谷大学の方に通う事になり、そこで初めて仏教と、真宗というものと出会ったんですね。そこで本当に私自身二年間勉強したんですけれども、本当に「あっこれでいいんだ」と。今の自分でいいんだといったところを仏教を通して教えて頂いたと。そういったところが私自身ありまして、そこからですね、思っていた事というのはですね、自分自身も悩んでたんですけど、この世の中全体、みんな多くの人が悩んでいて、またその悩むのを解決できないままに悩み続けている人が多いなと感じるんですね。私はたまたま父親のアドバイスで仏教と出会う事が出来たと。それによって私自身悩みがこう、何かこうもやもやしたものがすっきりしたという感覚を得たんですね。そういう感覚をですね、他の人もきつと求めているんだろうなと。絶対に悩んで悩んでそのまま最悪の場合は自殺してしまうという、それが現実として起きていると。そこで踏みとどまって何かこう縁があれば、もしかしたら仏法に出会っていればその人もそういう自殺であったり、そういう部分にいかずに済んだのかも知れないというようなのが私自身感じているんですね。本当に私自身思うに、仏教と出会えなかったら今ここに、そもそもその命の話ですね。ここにいられるかといったところに疑問を感じるところでして。本当に仏教というもの

が人々のこの生活、人生において大切なものだと感じております。

ですので、それを他の人にも伝えたいといったところが根源なんです。私自身が救われた、だから悩む人にも、みんなにも伝えたいんだという思いが今すぐくあります。そこで学校を卒業するにあたって出会ったのが證大寺でした。色々話を聞かせて頂いて、その生涯聞法といったところですね。まず私自身が勉強して、もっともつと聞法して、その仏様の教えを大切にして、また自身身の命を大切にします。そういった部分とさらには仏教人生大学で仏教を公開する場、今まで仏教に縁のない人にも気軽に来て頂いて、それで何か人生の中で悩みとかに対してのアプローチですよ。そういったきつかけになるような場を今、證大寺が進めていると。そういったお話を頂いて「あつここだな」と。私自身がここで僧侶として勤めていく事こそが、自分の中の願いなんだろうなというのを感じたのを、今でも覚えています。半年以上前ですね、面接に来た時にそういった思いをしたのを覚えていきます。ですからこれからも、なぜ私が證大寺で働くのか、そういったところをまた問い返すと、やはりそこなのかなと。自分自身の、まあもちろん聞法して自分の命といったものを確かめていくと同時にですね、やはり悩み苦しむ人が絶対いる。ただ、きつかけがないんですよ。僕自身きつかけがなかったのでもずっとずっと悩んできました。たまたまあった一つのきつかけ、縁によって救われたというような感覚を得たんですね。そのきつかけがですね。今悩んでいる人達と仏教の橋渡しと言ったらいいんですかね。そういったきつかけを与えるような、そういう僧侶にな

りたいといったところが本当に強い思いでありまして、これからもその一つ一つ出会いを大切にしたい、悩んでいる方がおられたら、そういった事をちよつと私自身の経験を踏まえながらですね、お伝えして一緒にですね、私自身も今、全てが解決したわけではないので一緒に聞法をして自分達の人生というものを考えていきたいと。そういった風に、またこれから證大寺で僧侶として勤めて参りたいという思いであります。以上で感話とさせて頂きます。ありがとうございます。

船橋昭和浄苑 営繕サービスク 濱口順子

よろしく願います。私は證大寺に勤めて今年の四月で丸九年になりました、十年目を迎えました。私が入った時は鶴林さんという先輩がいて、仕事を教えてもらいました。鶴林さんの仕事に対する姿勢はとても素晴らしくて、参詣者の方にも丁寧に対応していましたし、常に動いていたんですね。休んでいる時は本当に休憩の時、お昼の休憩の時くらいでした。私はその姿を見て本当に尊敬していましたし、自分も頑張らないといけないと思いつつ働いていました。

その鶴林さんが二年前に退職されました。その時はもう目の前が真っ暗になりました。これから職場を考えると不安でたまりませんでした。今考えると、私は鶴林さんという傘の下で気楽に自由に仕事をさせてもらっていたんだなと感じ、それをお陰様で今まで楽しく仕事をしていただと思えました。

辞められてから私は年功序列で鶴林さんがやってこられたもどきのような事をやっていますが、溝邊浄苑長から班長の話を頂き、より一層の団結でお願いしますと言われました。が、今まで通りの事しか出来ませんし、「長」が付くのは重すぎますし、本当にそんな器ではないので。でも、これから四人一丸となつてやっていかないといけないしお引き受けいたしましたので、そこから私に重圧がかかってきまして、職場では一応へらへらとしていましたが、家に帰るとため息の連発でした。主人がそれを見て「そんなに辛いんだったら辞退したら」と言ってくれましたので、それで私は明日言おうと思つて出勤するのですが、何か言えないんです。今度言おう、今度こそ言おうと思うのですが言えないまま、色んな行事で動いている内にこのまま来てしまいました。私は本当に頼りない「長」でありまして、今、女子営繕は私を含め四人でやっています。千葉さんは私の気付かない細かいところに気が付き、すごいなと思います。河野さんは暑い日でも寒い日でも、大変な仕事を嫌な顔しないで「いいよ、いいよ。大丈夫、大丈夫。」と言つてやってくれます。大変ありがたい事です。鈴木さんはこの九月で一年になりましたが、私がうっかり忘れてしまつたりした事でも「やっておきました。」とさらりとやつてくれますし、物事を冷静に見てやつてくれるので本当に助かります。私はこの三人のお陰で、「長」というものをやらせて頂いているんだと感謝しております。

もちろん、事務の方々にもたくさん協力して頂き助けてもらっています。僧侶には法話を通して仏法を学ばせて頂き、自分を当てはめてハツと思つたりする事や、うんう

んと頷ける事など、そんな事で学ばせてもらっています。男子宮繕の方にも、私達からの色々な要望や注文にも快く手伝ってくれて対処してくれます。本当にありがたいです。私はこんなたくさんの職場の方のお陰で女子宮繕の長としてやらさせて頂いているのだと感謝しています。私も微力ではありますがありますが、皆様のお陰様になれたらなと思っと思っていますし頑張ります。

法要のお客様から「お陰様で無事三回忌をやる事が出来ました。ありがとうございます。ありがとうございました。」とか「いつもご苦勞様です。ありがとうございます。」など、お客様の方からお声を頂く事もあります。正直、本当に嬉しく思います。

浄縁墓で週に二回、掃除をやっていますが、お参りに来られた方、男性の方なんですけど私達を見て「どおりでいつも綺麗になってるんだ、ありがとうございます。」と言っ頂き、お参りして帰っていかれました。それは真夏の炎天下や真冬の北風の中、頑張っ掃除して良かったなと思える瞬間でした。六月には手紙処ラウンジが参詣者の皆様に使っ頂ける事になり、これから多くの方々休憩して頂けたり、故人様に対してや家族や自分に対して手紙を書いて頂けるように、ラウンジの中、トイレの中を綺麗にして、落ち着ける場所にしていけるようにしていきたいと思っます。

テーマである「なぜ證大寺で働くのか」は、私にとっ「お陰様」という気持ちを持って感謝を忘れないように知らしめてくれる場所になると思っます。ありがとうございます。

森林公園昭和浄苑 営繕サービスマン 大西一彦

皆さんこんにちは。森林の営繕をさせて頂いてます大西と申します。八月から働き始めて、ご縁があつて通わせて頂いてますので、まだちょっとこんな深い話は、なかなか難しいんですけども、お話を頂いた時にふっと頭に浮かんだエピソードを話させて頂きます。

僕は週三日か四日通わせて頂いて、それ以外はですね、野外活動というか自然体験活動という事をちよつとやっています。具体的にはロープを木にかけまして、子供達とかお客さんに登って頂いて遊んで頂くというような事をやっています。色んなネタがあつて色んなプログラムを提供しているんですけども、それをやっている時にいつも自分がそのプログラムちゃんとして出来ているかなつていうのはかる基準というのが自分にあります、それは、やった事によつてお客さんとかの何か気持ちとか心、内面に変化が起きたらどうかというところを結構ポイントにしています。具体的に言うと、例えば誰かに川釣りを教えたとなると、全く川釣りを知らなかった人が見た時の川と、釣りを知ってから、知ってから出来るようになってから見る川つていうのは多分、違つてくると思うんですね。ああ、あそこに魚いるんじゃないかとかですね、あるいはこの川は汚いからじゃないんじゃないかとか。そういう風な気持ちとか、見方が出てくる。そういう変化が起これたら良いなという風に、実は思つて色んな事をやっています。ですから木に登つて木に対する気持ちが変わつたらいいなという風に思っているんですけども。

ちよっと話変わるんですけれども、先日、本当に一ヶ月前かな。自分のお墓参りに行きました。大西家ですね。港区にある光明寺さんという東京タワーの近くなんですけど。まあ普通にお花をあげてお線香あげて。結構な傾斜のところにある、昭和浄苑と近いような傾斜のところの中腹に大西家の墓があります。終わってこうやってふっと見た時に、何て言うか、ちよっとこうお墓に対する感覚が変わった感じがしたって言うんですかね。すごくこう、あれ、このお墓の境界はどうなってるんだろとか。広さってこんなもんだっていうのと、それから今度、こっち側がこう、山になっていきますんで、この上の奥はどうなってるんだろかとふっと思ったんですね。

子供の頃から通っていたお墓だったんですけど、本当に初めて奥の方まで入って行きました。入っていくとですね、色んなまた違った形のお墓があって、何か明治時代の墓とか大正時代の墓とか。それから何かこういう灯籠みたいな、そういうのは江戸時代の墓だよという話を、そう言えば昔、父から聞いたな。ああ、江戸時代の墓がこんな奥にあるんだとかですね。という体験をして、それで十五分くらい歩いたんですけど。歩きながら「あれ、俺、お墓に対する感覚変わったな。あ、変わった」というところで、そのさっきの自然体験の基準にまた戻りますけど。あ、自分変わったじゃない。これ、何がこの変化を起こしたんだろかと考えた時に、證大寺に関わって、ああ、というところ。まだ具体的にそれが何によってその変化がどう起こったかは分からないんですけど、ああ、変化が起こるんだっていうところで、何故というところを問われた時に、変化が起こるんでこ

の先も楽しくやっていけそうだし、何だろう、自分が進化していく形、何か働きかけになっていくんじゃないかなという風な事を今感じて、また日々楽しませて頂いてます。まあ、こんな感じで。どうもありがとうございます。

### 江戸川本坊 営繕サービス課 今井洋子

おはようございます。江戸川本坊で働いている今井と申します。よろしくお願いいたします。

私は皆さんみたいにレベルの高いお話や、それに證大寺に働くというテーマを頂いたんですけど、ちよつとテーマにはずれてしまう事をお許し下さい。

私は今まで生きていた中でお寺にお勤めするという事が初めてで、右も左も分からずやってきました。私の家のお墓はお寺ではなく、都営霊園で八柱というところがございます。一応は真言宗なのですが、それほど深く考えてはいませんでした。しかし、私の父が亡くなってから少しずつですが気持ちが変わってきました。父が入院している時にお風呂に入りたと言っていました。しかし、病院の先生の許可が出ずにお風呂に入れぬまま亡くなりました。葬儀の時はお風呂を入れたいという事で、湯灌土さんをお願いして入れてもらいました。その時、衝撃を受けました。まだ二十代の方が父をお風呂に入れていたんです。それから私は葬儀屋で働きたいと、葬儀屋を何件も受けました。しかし結果は駄目でした。何回も受けても不合格だったんです。何がいけないのか全く分か

りませんでした。それから何十年か経ち、その間も葬儀屋を受けても不合格でした。私には真のオラがないのかと悩んだ事もありました。亡き故人の供養をしたいだけなのに何故と、證大寺に決まった時はとても嬉しかったです。何か一つでもいいから、何らかのお役に立ちたいという思いがあります。證大寺では色んな事を学びました。本当に感謝しています。全く素人の私が少しずつ身につけているという事が自分でも分かります。友達からも「最近、何か違うね」と言われるようになりました。悪い事ではないので、その言葉は素直に受け取りたいと思っております。

こちらに入る前は電車で足を踏まれたりすると「この野郎、ムカつくな。」と、何か日常茶飯事でしたが、最近ではわざとじゃないから仕方がないよね、謝っているんだから笑って「大丈夫ですよ。」なんて余裕も出てきました。證大寺での色々な行事に参加させて頂き、盂蘭盆会、法要の意味など勉強になりました。親鸞聖人の名前は聞いた事はありませんが、具体的にどのような方とは知りませんでした。そのような事も教えて頂き、教えを学ぶ場になりました。私の友達は色々な方がいます。友達にも良い事ならどんどん伝えていきたいと思えます。生涯聞法、私の中に刻み込まれた言葉です。この言葉を大切にしていききたいと思えます。ありがとうございます。

## 住職の言葉

感話をして下さった皆さん、ありがとうございます。一人ひとり拍手したいような気持ちでいたんですけども、それ以上に本当に大事な話だなと感じています。また報恩講に感話という大切な場があつて良かったと感じております。

今から三明先生によるご法話があります。講題は「歎異精神とサンガ建立」です。講題選定については三明先生にご相談を差し上げまして決まったわけであります。昨年一昨年も職員報恩講をするにあたっては先生に相談をしてテーマを頂いているわけですが、昨年は證大寺が四〇〇年を迎えた特別な年でありました。それにつきまして四〇〇年前にお寺を作った人、その願いに向き合わなければ、四〇〇年の記念法要がイベントになってしまうんじゃないかと。もしくはこの報恩講自体も意義が分からないでやるならば、どれほど人が集まっても何か虚しいものでありましよう。私は三明先生から、お寺は木材や瓦、釘などの素材で出来ているのではなくて、お寺を開き維持してきた人々の願いで建立されたのだと教えていただきました。お寺は願いが建立したものなんだということを聞いて驚きました。私がお寺にいるのですから、お寺を開いた人々の願いを受けていきたいと思いました。

本日の感話テーマは「なぜ證大寺で私が働くのか」です。「私」が先ではなくて「證大寺」が先に出てくる理由は、私たちが働く場所である證大寺には代々伝えられてきた願いがあるからです。證

大寺とはどういう場所だったんだろうか、何で開かれたのだろうか。それを知ることがとても大切なことなのです。自分が働く場所として證大寺を選んだ意味を知るには、働く場所の意義、自分がいる場所の意義について分からないより分かった方がいいと思うんです。どうしてたくさん職場がある中で、私が證大寺を選んだのかを学ぶことは大切だと思います。八百屋さんで働くのだったら、扱っている野菜の産地や生産者のことをしらなければ、八百屋さんで働く意義がはっきりしないと思うんです。そういうのでなくて私達が勤めるお寺にはどういった願いがあるんだろうか、その事に向き合うには聞法することがとても大切です。

自分なりに頑張っているじゃないかというような正当化したい気持ちもあるのですが、そこからは力が出ないのです。私が頑張ってお寺で働いているのですが、その元にはこのお寺を開いた人、例えば先代やそのもとをさかのぼれば浄土真宗をあきらかにした親鸞聖人、なによりお釈迦さまがおられなければ證大寺は存在しないのです。皆さんの感話には参詣者との出会いについて語られたことが多いと思います。お寺にお参りをする人が今日までこの場所を相続してくれたのです。そしてそこで問題になることは、なぜお寺を大切に伝えてくれたのだろう。何を伝えようとしたんだろう。なぜ報恩講をこんなに大切にしてきたのだろう。同じ人間のはずなんです。何をそこまで大事にしてくれたのか、その事を聞かせてもらいたいのです。

今回の職員報恩講の法話にあたり講師の三明先生に相談しました。證大寺職員はただの職員では

なく、一緒になってお寺を開いていく仲間、個人では出来ないような大事な事を成す仲間同士で報恩講を開催し、仕事の意義を確かめたい、お寺が開かれた元の願いを聞かせてもらいたい。そういう事を相談する中で「歎異精神」という言葉を教えていただきました。「歎異」という言葉は『歎異抄』の歎異です。異なるを歎くとは、相手が間違えていると責めるとか、自分が間違えていると落ち込むって事じゃないと思うんです。異なるとは何から異なっているのか、その元がなかったら何がどう異なっているかも分からないし、異なっているという事さえ気付かないのだと思うのです。うまく言えないのですが、皆で本当の話が聞きたいのです。日頃の私自身が考えている出来る出来ない、済む済まないとか、何だかそういった普段の心ではなくて、本当の事が聞きたいと。今日は報恩講です。教えを聴聞する大切な場所ですから一緒にやってこの場所が開かれた元の願いを確かめていって、そして私達が證大寺で働く意義を明らかにしたいと願っております。また今日は最後に全体の総括の話し合いでも、このテーマを皆で話し合いたいと思います。よろしくお願い致します。



法  
話  
I

皆さんこんにちは。今日は證大寺様の職員報恩講という事で参らせて頂きました。感話をお聞かせ頂きましてありがとうございます。

(感話をされた) 今井洋子さんはお勤めになってどれくらいになるんですか。

(今井さんの返事を受けて) もう半年ですか。どうもありがとうございます。「変わったね」という具合にお友達にも言われたという事です。そんな具体的な例も仰って頂いて大変良かったと思います。證大寺に勤められて良かったですね。

證大寺がこの地に開かれて、今日まで歩を進められてきたという事の意味をお互いにきちんと頂いていこうという事になるのではないかと思います。そこに皆様は、職員としてお勤めし、私はまた稀なご縁を頂いて證大寺様に二十年来関わらせて頂きました。東京に開かれていくという事については先代住職の井上雅嗣氏とそれから坊守様が話し合って協力して、そして開かれた事でございます。またその願いを受けて、現在のご住職様が頑張っておられると、そういうところなんです。

そういうところで、ご縁を頂いてきたという事の不思議さをつくづく感ずるところでございます。不思議とは自分の思い計らいではないって事です。よくぞこういう機会を頂いた、関わりを持たせて頂いたという事を思うわけです。

ただ今はまずは勤行があり、それでご一緒にお勤めがあったわけでございます。今日は親鸞聖人

の正信偈を普段よりも丁寧に勤められたという事もお話がありました。報恩講というのは、年に一度の大変大事な集いとして営まれるという事です。

親鸞という方は浄土真宗の教えを明らかにされた方です。このお御堂の中には御本尊に向かって右手のお厨子の絵が親鸞聖人の絵姿でございます。白い襟巻に黒い衣というのが大体、親鸞聖人の姿なんです。

先ほど感話の中にも、親鸞という人の名前は知っていたという仰せがありましたけれども、多くの国民に知られているのが親鸞という名前だと思います。肖像画までは知る人は少なくなるかも知れませんが、肖像画を見れば印象が残りますね。人の名前とその写真とを見れば繋がって、連想が繋がって記憶が定着しますね。あの方どなたって聞かれたら、親鸞聖人だという具合にためらいなく仰って頂くようになられたら、まずは證大寺にお勤めであるという事の証明にもなるのじゃないでしょうか。

親鸞聖人は社会科の教科書に鎌倉仏教の、鎌倉時代の思想家、宗教家として必ず名前が載っております。大体もう小学校の教科書からして載るんじゃないでしょうか。歴史や社会科の教科書に親鸞の名前が載っていないならば、その教科書は不合格の教科書だと思いますね。他にも日本には、世界にも誇るようなお方として、鎌倉時代には法然上人、道元禅師、日蓮上人というような方がおられるわけでございます。

迦れば弘法大師（空海）や伝教大師（最澄）です。更に迦れば聖徳太子、そういうような方々が日本の精神史において大変重要な位置を占めておられます。その方々の中で赤の他人というのではなくて、親鸞聖人には私どもは深い、特に深いご縁があるんだという事になるのではないのでしょうか。現に今、ここに同じく集うておるわけでございます。それぞれに今日までの中でお産まれになったお家での宗教があった方は、そういうところからもご縁がおりだと思えますけれども、そうでない方も今ここに集まっているということ自体が親鸞聖人に私どもが今や深いご縁があると、そういう事でございますね。

その親鸞聖人のご命日が十一月二十八日だという事でございます。これは西暦で一六二二年です。九十歳でお亡くなりになりました。時代の大変な転換期、ちようど平安時代から鎌倉時代の転換期にその生涯がありました。政治、経済、社会、芸術、思想、宗教、そういうものが根こそぎ大きく変わっていくというのが転換期なんですね。今までの物差しが間に合わなくなってくる。価値判断の基準がガラッと変わってしまう。まさしくそういう時期に、ちようど、先ほど申しました法然上人、道元禅師、日蓮上人、そういう方と共に親鸞という方はおられたわけですが、特に四人の中では親鸞聖人が一番長生きです。九十歳の生涯だったと。もちろん栄養注射も、ビタミン注射も、それから抗生物質もインフルエンザにタミフルなんてそんな特効薬もない、点滴もないし普段の体調を計るのに血圧計もないと。食べ物もなく飢え死にするような人がいっぱいいるような、そ

ういう時代なんですね。『方丈記』という本を見れば、京都を中心に書かれていますけれども、京都の中でもう沢山の人が亡くなって、それで死臭が漂ったというような事が記録されておる、まさしくそういう時代に九十年の生涯を生きられて、そしてただ生きただけでなく、言葉を残し、その言葉が後の人の生きる指針になってくる、教えになってくる、そういうような方だったという事でございます。お互いに元気で長生きしたいですね、というのは大体、人の希望だと思わんですが。その元気で長生きする秘訣は何かと言うと、やはりものの見方、感じ方、考え方の心にあるのではないかと思うわけです。

そういうところで親鸞聖人に教えを頂いた方々が感謝の思いから集うて来て、この浄土真宗の教団になりました。私どものご縁のお寺は、京都の東本願寺が本山ですけれども、そういう中で親鸞聖人のご命日、十一月二十八日には集うて親鸞聖人に感謝の思いを新たにします。そういうような事で報恩講が営まれてきたわけでございます。

それで、十一月二十八日というご本山での報恩講に向けてそれぞれの私どもの生活環境、職場環境のご縁によって、それぞれが報恩講を勤めていくという事が「御取越(おとりこし)」と、そういう事で行われてきたわけなんですね。「取り越し苦労」っていう言葉ありますね。先立ってあれこれ心配し、苦労する事を「取り越し苦労」って言いますよね。その取り越すっていうのは先立って勤めるといふ、そういう意味です。ですから、報恩講は十一月二十八日だけに限った事ではありません

ん。それで皆様方がこのように集うて本日、證大寺の職員の皆さんの報恩講です。私はご案内の通り、九州大谷短期大学に学長として勤めさせて頂いておりますが、九州大谷短期大学においても報恩講が行われます。これは十二月の第一水曜日という事で行ってまいります。なぜ大学において勤めるかと言うと、それは「九州大谷」という名前ですね。それが親鸞聖人の精神に基づく人間教育を行っていきますという事の名乗りなんです。学校です。建学の精神と申します。建学の精神が立たなければ学校は成り立ちません。なぜこの学校を建てるのか、どういう意義をもってこの学校は成り立っていかなければならないのか、そういう事を明示するのが建学の精神なんです。それは会社をこしらえるにしても、やはり会社設立の目的が必ずなければいけないはずなんです。それがはつきりしないままですと、どうなるかって言うと、利益追求のためにあれこれの事を行うという事になり、そうすると色々なやり方や方法がありますから、結果、何の会社か分からなくなったりする事があるのですね。

だからそもそも、会社にしましても創業者の願い、そういう事がやっぱり明示されているという会社がよろしいのではないかと思えます。あるいはそういう事を確かめるという機会、そういうものを持っている会社がやはりよろしいのではないかと思うのです。儲けのためというのを最高の価値に置きますと、無駄を省いてそれで儲ければいいわけですから、利益追求。そうすると経費削減へ。そっちの方にいくと汚染物質、有害物質を海に流しても川に流しても、有害物質を処理する

のにお金がかかりますから、それは省いて、それで製品をこしらえて、それに伴って生ずる有害物質はもう垂れ流しにすると。それが公害問題です。そういう事があってはならないわけです。これまでにそういう公害を起こした会社がいくつかありますね。今も歴史に残っておりますが、そういう会社というのは利益追求という方に主眼がいつて、人を結果として傷つける、殺す、そういう事があっても利益の方を優先させたという事で、これは企業として間違いないんですね。こういうことは天下、国家、世界の道理として言われなければいけない事です。

それでそれぞれが何らかの形で社会に貢献する、皆さんに貢献する。そういう事がなければ社会における会社、組織、あるいは学校、色々な団体は成り立ちようがないと思います。社会に害をもたすための組織というのはあってはならないし、許されないわけです。

それでお寺におきましても、やはりお寺創立の精神、そういう事もちゃんと考えなければいけないでしょう。それで證大寺様で大事な行事が行われるという際に證大寺さんの創業の精神と言いますか、設立の願い、そういう事をちゃんと確かめなければいけないでしょうという事を申し上げてきたわけでございます。殊に昨年は四〇〇年という歴史の節目であり、その時にどのような行事を行うかとかいうような事を話されました時に、やっぱり證大寺の願いという事をきちんとしていかなきゃいけないと。建物は材木や色々材料で建つけれども、お寺は何で建つかと言うと願いで建つんじゃないかと。そういう事で申し上げたわけなんです。そういうところからここを職場として

関わる皆様方それぞれも自覚的にこの職場に関わって頂かなければならないと。これはもうどの会社にしてもそうだと思います。従業員、職員が何のための会社か分からないけれども、とにかくおるんだというのでは、そういう会社は潰れます。成り立ちませぬ。私自身も学校経営という事において、あまりにも学校職員の方々が無自覚な面があったので私としては学長になる前から色々申しましたが、学長になったからには職員一人ひとりがきちんと九州大谷短期大学の設立の願いという事を承知して、そして日頃の勤めを果たしていかなければいけないという事を繰り返し繰り返し呼びかけております。

そして、そこに貫く精神、基本の精神というのはまず親鸞聖人というその人とその教え、思想に関わります。それが基盤になつているため、親鸞という方はどういう方なのか。親鸞という方がどういう事を教えて下さったのか、何を願われたのか。そういう事を改めて聞き、考え、確かめると。そういうところからどういふ恵みを頂いているのかという事に気付き、そしてその恵みに対してお礼を言っていくと。またお礼を實踐していくと。そういう事がこの報恩講という集いの意義であるという事なのです。

それで毎年、大体證大寺は十一月二十三日が本坊の報恩講で、それまでに各支坊の報恩講が行われて、そしてこちらの本坊で全体の結びという事でこう営まれておる。その報恩講の営みが、今日の職員報恩講からが始まりだという、そういう意義があるのではないのでしょうか。

そういう中でこの度も感話という事を大事にされて、お互いがお互いの気持ちを語り合い、そしてそれを聞くという事。これを大事にされているという事の意味は非常に大きいと思います。これは何かと言うと、一方通行で上司の命令によって組織が動く。そういう事だけでは組織は成り立たないのではないかという事です。お互いの協力がないと出来ないわけです。先ほど感話の中にも、ご自身は長たり得ないけれども、そのメンバーが一生懸命やってくれるお陰でお役目を果たさせて頂いているという、そういう感想を仰った方がありましたし、それはもっともの事なんです。ですから同じところに毎日働きながら、お互いがどういう人なのか、どういう気持ちを持っているのか。大体、声はどういう声なのか、そういう事を分からないで勤めておるとい、そういうのはよろしくありませんね。本坊と森林と船橋とそれぞれの勤務地があり、その場所における連帯というのがなければなりません。そしてそれと共に、全体證大寺の職員としての繋がりという意識がなければ全体として成り立たないわけです。そういう時に感話をするという事はやっぱり皆、感覚、感想を持ち、心を持って生きていくんですから、その心を開いて語り合うと。そういう事がなければならぬですね。身近な小さなところでは家の中からして、家族が何を考えているのかをやったり全く知らないというのでは駄目ですし、それから自分が勝手に相手の事を「こんな奴だ」という具合に決めてしまっているというのでは、本当の家族としては成り立ちません。そういう事でやっぱり私ども、自分の事を話すのは大変辛い面がありますけれども、それでもやはり聞いてもらいた

いという事もありますよね。聞いてもらいたいし聞きたい。相互に交流したい。それが、私ども人間なんじゃないでしょうか。大体、人という字からして棒が二本支え合っているのが人だし、そして人間と言ったら、人の間って書きますね。これは人と人の間柄があるのが人間であるという事です。単独で人というのはないんですね。人は社会、繋がりがあってこそ人たり得るといふ事なので、どうしてもこのような形にして感話を語り合うという事、また聞く、聞き合うという事が大事になります。それからご飯は一緒に食べましょう、そういうところが、人たり得るところなんじゃないかと思えます。現代社会はその点、非常に危なくなっているわけですね。「孤食」というんですね。そういうのが随分と行われているようです。「個食」と言ったら個人が食事する。ひとりが食事するというので、あまり価値観が入っていない言葉ですが、「孤食」となると子ども偏ですね、これは幼くして親がいないっていうのを「孤」というんですね。そしてひとりぼっちというのも表しますので「孤食」と。こうなると非常に寂しいですよ。さらに細かく言うと幼くして親がないのが「孤」、年老いて子供がいないのを「独」と言うと。それで「孤独」という言葉があるわけなんですよね。だから独居老人なんて言うのは一人。独り暮らしの老人という、そういう言葉遣いは、齡取って子供がいないというのを「独」と言うと。そういうところから出てきていると思います。

とにかく、孤食というのは人間の生活ではないんですね。でもそれがどうでしょう。どこのお家も、家で家族がいながら勤めとの関係、勤務との関係とか塾との関係とかそういうので一人で食事を済ま

せて、それで出ていくと。そのような事が当たり前になってきてますね。みんながそうなっているから、それでいいんだっていう具合になってるわけなんです。それは何かと言うと、企業に都合がいいんです。大企業に都合がいいからそうやって早く出勤する、遅く出勤する、その出勤時間がそれぞれ別々。ですからご飯を食べる時が別々。それもやむを得ないというような風潮になっていくわけです。これは企業としては三交代で一日回せば、工場はずっと休まず動き都合がいいわけですよ。八時間労働で三交代やれば三×八＝二十四で一日ですから。一日中動いている。企業、大企業を中心とすればそうなるわけです。そうすると子供の体調が悪いか、親の具合が悪いか、連れ合いが熱出したとかそういう時に看病しなきゃいけないとか、そうやって休むと企業にとっては何率が悪いわけです。だから大体の人は、家族の病気を差し置いてもとにかく会社に出ると。仕事に出ると。そっちの方が美德だとされてきたわけなんです。しかし、ここで大きな問題は、家族なんだけど家族でないようになってしまふという事なんです。だからやはり食事は一緒に食べるのが家族。それから職場でも一緒に食事を食べる機会を持つという事。こういう事を心掛けていかないと人間の社会として成り立たなくなるのではないかと思うわけです。それから、家族と一緒に暮らすのが当たり前でしょう。ところが転勤で家族を置いて遠くに勤めなきゃいけないと。それも会社の利益中心でいくとそうなるわけですよ。だから辛いのは、例えば東京で家を建てたつて言ったら「おお、家を建てたそうだな。君ちよつと九州転勤」という具合にして、会社への忠誠

心を試すとかです。そういうような露骨な人事も行われてきているわけです。普段から一緒にいて話をするとというのが夫婦でしょうし、それから家族でしょうけれども、三ヶ月も四ヶ月も半年も会社の都合で離れ離れになっていると、夫婦だって変わってくるのじゃないでしょうか。知らぬあいだに子供がこんなに大きくなったかとか、そういう具合になったり。そういうのが異常事態なんだと、もう一回きちんと考え直さなきゃいけないのではないかと思います。何を申し上げたいかと言うと、サンガについてのことです。サンガというのはですね、インド語でございます。だから訳の分からない字ですね、「僧伽」って当て字ですから。だから片仮名でもいいんです。「サンガ」って。却って今はサンガって片仮名で書いた方が時代には合っているとも私は思います。そのサンガっていうのは「和合衆」という事。和合した人々の集まりですね。それをサンガと言います。けれども今の人には和合衆と言っても分からないでしょう。だから「和やかに集う人々の集まり」という事でございます。だから人は一人では生きていけない、共同して生きていかなきゃいけない。その共同して生きていくっていう時に、多く集まれば集まる程、ものの見方、感じ方、考え方、趣味、そういうのが違いますね。そうすると人が集まると大体揉める。それを揉めないようにしてやっていくっていう。そういうのがこの「和合衆」という事なんです。これは、ですから実際には難しいわけなんです。「今日、何食べる？」と言った時に、私は寿司、私は焼肉、私はカレーとか、一人ひとりの事を言っていたら、一緒にご飯食べられませんよね。じゃあ君はカレーを食べなさい、私

は焼肉を食べるからという調子で食べるなら、家族で食事ができないことになりますよね。それで、それぞれ持つてくるお弁当は違うとしても、まあ一緒にまずは食べようよという事です。この和合衆という言葉が「仲間」という具合に言えばもっと分かりやすい。そして、仲間がどうやって、いがみ合わないで仲間たりうるかと言うと、それは基づくものがないとならないわけなんです。色々な意見の対立はあっても最終的に調整して折り合っていくようになるというのには、やっぱり、何のための仲間なのかという事がはっきりしないといけないですね。それで「サンガ建立」とは、和合した人々の集まりを実現したいという事でございます。それが閉鎖的な仲間というのでなくて、広く仲間としての繋がりを持っていくのにどうすればいいかと。そういう事が課題になるわけなんです。それは無理だと言ってしまったら最初から無理でしょうけども、まずは和合というものはどうして成り立つかという事については、仏法があつてこそ成り立つと。仏法がなければ真の和合は成り立たないというのが、インドの釈尊の時代において気が付かれた事なんです。道理に目覚めた人の事を「仏」と言う。その道理の事を「法」と言う。で、「仏」と「法」とあるだけでは生きてはたらない。仏の話聞いてなるほどと頷く人。その仏の話、仏陀の話聞くという事は道理を聞くという事で、その「仏法」を聞いてなるほどと思ひ、受け取る。そして仏法を受け取ったところで更に自分が気付いた事を人にも聞いてもらう。そうやって、共有していく、共感していく、そういう事がなければ仏陀、仏も法の道理も何も伝わらないわけなんですよね。

それでこの和合衆、サンガがあつてこそ初めて、生きた仏法になつたというのがまずお釈迦様の時代からしてそういう事なんです。そして和合した人々の集まりになりたいというのは、私どもの心の底からの願いじゃないかというお見立てが、仏教のお見立てなんです。人は集まると必ず喧嘩するものだ。そんなもんさというのでは終わってられない。喧嘩するのも仲良くなりたいたいからじゃないのかとか、仲のいい夫婦ほど喧嘩するとかね。「お宅のお父さんとお母さん、喧嘩する？」と聞いた時、「しない」と言つたら「ああ、結構ですね」と言う場合と、「心配ですね」という場合とありますよね。喧嘩すらしないと。そうなれば全く、形だけの夫婦。形だけの家族という事になるわけです。だからそれはどうしても意見はぶつかるし、喧嘩にもなる。そういう勢になる事もあるけれども、しかしながら和合していくんだと。そういうのにはお互い同士が向き合つて語り合つていう、そのところだけではないもつと高い価値、あるいはより深い願い。そういうものが支えがあつてこそ語り合いも喧嘩も成り立つと。そういう事になるわけでありましょう。

基本は、とにかく仲良くしたい、和やかに暮らしたい、穏やかに平和で生きたいと。そういう願いを実現していくのが和合衆、人々の集まりであると。これが仲間内だけでというのではなくて、開かれた和合衆という事になっていかないと、つまり仲間内同士で固まると今度は別の仲間と喧嘩になるわけですから。それだと本当の和合にはならない。だから開かれた和合衆になつていかなきゃいけない。そういう事が私どもの心の底の願いなんじゃないのか。そういう事をまず基礎として、

私どもはその願いを基礎として生きているんだ、とこれぐらいになれば、いわゆるその宗教間の対立、集団同士の対立、そういうのを克服していかなきゃいけないという、そういう道がなきゃならないという願いが開かれてくるんじゃないでしょうか。

ですから今、サンガというのは仏教の用語、インドの言葉ではあるけれども、宗教や思想や様々な利害を超えて、やっぱり一緒に仲良くしたいと。そういう具合になればですね、元は仏教の言葉だとしても、あるいはインドの由来の言葉だとしても、「サンガ建立」というのはキリスト教の人にもイスラム教の人にも無宗教の人にも通用する話になってくるんじゃないでしょうか。みんな仲良くしたいんですから。そういう願いというところを元にして、私どもはあるんだと。こういう事をまず確かめたいわけでございます。そうすると「サンガ建立」という時に、どうしても出てくるのがなかなかサンガたり得ないという事です。「和合衆たり得ない」という事です。和合衆たり得ないのは何故かと言うと「お前が悪い」と言っている間は和合衆たり得ないわけなんです。じゃあ「私が悪いんです」って言って言って和合衆たり得ますかって言うと、そんな事ない。「私が悪いんです」って言った時に、「お前が悪いよ、やっぱり」って言われたらまた腹が立つでしょう。口先だけで「私が悪うございます」と言ったら駄目なんですよ。だからそれぞれが「私が悪い」っていうのをきちんとかき付いていかなきゃいけない。しかしながらただ気が付くだけでは、先ほども話題になりましたが、落ち込みにもなってしまうでしょう。ただ落ち込んで終わりというのではないんですね。そ

ういので和合衆たり得ない、和合衆の願いと異なっているものが自分にあると気が付いたところから、それを歎きの気持ちで感ずるといのがこの「歎異」という言葉なんです。「異なりを歎く」という。あるいは「異なるを歎く」という事ですね。だから「サンガ建立」という願いがあつてこそ、異なるを歎くというのが出てくるんですね。だから題目としては「歎異の精神とサンガ建立」と出して頂いておられますけれども、意味から言うと、「サンガ建立」という願いがあつてこそ、「歎異の精神」というのが出てくる。そして、「歎異の精神」があればこそ、「サンガ建立」という事がまた成り立つんだと。成り立っていくようになるんだという事です。それが今、最初のお話として題目を頂いてのこの解説という事で申させて頂いたという事でございます。

つまり證大寺の願い、あるいは私も各自各自の願い。そういうのがある中でうまくいかないという事があつて、それでうまくいかないというのは何故なのかと言うと「あいつが悪い」という話でなくて、やっぱり自分自身にも問題があるじゃないか、そういうところから自分の問題、間違いというのに気が付いたところから、それを歎く。歎くというのはそう簡単に自分の間違いに気が付かないし、自分の間違いに気が付いたからと言ってそう簡単に直せない。直せないのは自分自身にそれこそ増々問題があるからだ。そういう事に歎くという気持ちがあつてこそ、その歎きが共感してそれで願いに立っていくという具合に努力が始まるんじゃないかという事でございます。

以上、題目についての、講題についての解説についていう事で、解題についていう事でお話をさせて頂いて、

一回区切りとさせて頂きたいと思えます。



感話テーマ

「なぜ證大寺で私が働くのか」

# 職 員 感 話

鍋島やよい  
末廣 亮  
長瀬 珠栄  
根来 輝吉  
野田 裕子

## 職員感話

### 仏教人生大学事務局 鍋島やよい

仏教人生大学手紙処銀座事務局の鍋島やよいです。よろしくお願ひします。私は證大寺で働く自分のために働いていきたいと考えています。證大寺に貢献したいという思いで働いているわけではありません。また、生活のため、食べていくために働いているのではなく、仕事で得た経験を食べるくらいの心持ちで働かせて頂いています。人生の目標のためという思いを軸にしていきたいと考えているからです。今は目標を目指していくために欠かせない大切なプロセスを経ている最中なのだと思えています。

そのように思うと、困難な状況もありがたいご縁として頂けるようになれるのではないかと思っ  
ています。聞法会に参加させて頂き、度々私が自分の両親を選びそこに産まれたいと望んできた因  
があるかと教えて頂いています。また、そこから自分の命の意味を問い、自分が産まれてきた因縁を  
深く考える事も大切だと教わりました。その事を教えて頂き、證大寺で働く事を通して自分が望ん  
で産まれてきた事に対する御恩を確かめたいと思うようになりました。證大寺に働くに至った原因  
と意義を確かめていたい、確かめていきたいと思うようになりました。

お恥ずかしい事ですが、私は課題に行き詰まったり苦しい状況になってからようやく今までの平

穏無事であった環境がとてもありがたかった事だと、後になって気付くという事が多くあります。どこか感謝するべきタイミングを外してしまっているような、自分の残念な在り方を恥ずかしく思っています。常に感謝しているのではなく、自分の都合でありがとうを使ってしまうています。それは平穏無事でありたいという業に囚われて、問題を自分の事として正面から受け入れていないからだと思います。穏やかな現状に必死にしがみつこうとする私の姿が見えてきます。ここに私の抱える問題が示されているように思います。出来る事ならば、感謝と共に過ごしていきたいです。けれどそれが難しく、そう出来ていないのが今の私です。困難な状況を苦痛に感じたり、悲しさを他人と比較してひけらかす事は独りよがりで間違った事であると思います。ですが同時に、常に苦しみを抱え、困難な状況にいつでもなり得るという事を自覚していかなければ、感謝の念が沸き起こってこないという愚かさを私は抱えています。

今一度、親鸞聖人のお伝え下さっている「かたじけなさ」という感謝の念をしつかりと頂いて働いていきたいです。生老病死の悩みの受け皿となり、生老病死に向き合い気付きを得られる場所を公開していく事が、證大寺の実践している活動の一つです。人生の目標と、私が産まれてきた御恩に報いていくための方法を、より良い形で合致させて仕事に活かしていけるようにしていきたいです。ありがとうございました。

江戸川本坊 教化伝導室 末廣亮

江戸川で僧侶をしております末廣と申します。よろしくお願いします。「なぜ證大寺で私が働くのか」という問いに対して、まず出てきたのは一番に聞法できる、だから私は證大寺で働いているのだと思います。

私は年が二十五歳です。京都出身です。父母共にお寺出身です。私は小さい頃から母に「寺を継ぐというのは過去、未来、現在、全てを引き継ぐ事になるんだよ」と言われました。それが嫌で周りの友達と同じような環境、大学に行つて私も一時、就職しました。就職したところが証券会社でした。先ほど船井さんが言われたようにころころと毎日変わります。今日良いと言つたものが明日悪い、明日良いと言つたものが明後日悪いというような状況の中、私自身それについていけなくなり、適応できない自分に辛くなり辞めました。そして親、家族を頼り僧侶をするような形になりました。私は親戚の大分県のお寺から得度をしております。その際に出会つた親戚の方ですね、私は言いました。「坊さんなんかお経あげてるだけやないか。坊主丸儲けつていう言葉があるから、信じられんわ」。やはりなりたくない、なりたくないという気持ちを抑えられないというところもあつたんですね。そんな私の話を一生懸命に聞いてくれて。最後に「今後、君が僧侶になるにはしっかりと芯がないといけんよ」と言われ、大谷専修学院に入りました。そこでの先生との出会いから仏教の確かさを感じました。そしていざ、お坊さんになりました。間衣を着ています。「ああ、これで坊さ

んなんや」って思いました。

福岡の門司でお盆参りをした事があつたんですね。原付に乗ってぐるぐるぐる。暑いし、間衣はびちよびちよになるし、帰りたいなと思いながらも念仏申しながらいたんですね。一人のおばあさんに出会って、おばあさんが亡くなって悲しい。涙が勝手に出てくるし、しんどいわ」って言った時に、何も言えなかつたんですね。その時に私が思ったのは、私は仏教を何も勉強していないから何も答えられない。そう思い、それがきっかけとなって勉強しました。そして教師資格も取り、武宮顕紹先生と井上住職との縁で證大寺に入職しました。入職後、「僕は教師資格を取った」と。これで去年の私ではない、もつとできると思つたんですね。ある時0歳の葬儀をした時にまた何も言えないんですね。本当に念仏、自分が申しても救われなくて。法話を言おうとしても何も出来ない。もうダメだな自分と思いながらやつたんですね。それから自分は、そういった環境の中では本当にしっかりと念仏するしかないんだなと思つた。自分に足りないものがあるという心が起こってくるのは、聞法していききたい思があると思うんですね。ですので、自分の情けなさとか罪業性にいっぱいいっぱい、とても仏教に出会ってない人に教えを説こうじゃないか、というところにはまだまだだなれません。まだ皆さんの足を引っ張るような形になっているんですけれども。ひとえにやっぱり、しっかりと今自分自身が聞法していかないと思っています。證大寺に入職する時に意味も分からずお経だけをあげる僧侶になりたくないって住職と田

村さんと大空さんの前で生意気にも言ったんですけれども、聞法がないとそういう僧侶になっちゃうので。住職をはじめ職員の方がおられる中、そして三明先生もこうやって来られる中で、證大寺という環境はしっかりと聞法が出来る。その中で自分を聞いて、今後の道ですね。しっかりと仏道、僧侶としての生き方を訪ねたいと思ったので、今、證大寺で働いています。

ですので、何か貢献出来なくて申し訳ないんですけれども。これが今、私の證大寺で働く意味かと思えます。ありがとうございます。

### 船橋昭和浄苑 窓口サービス課 長瀬珠栄

船橋昭和浄苑の窓口サービス課の長瀬珠栄と申します。よろしく申し上げます。

朝、船井室長の感話に、お子さんになぜ働くかと聞かれる日が近いというお話がありました。私は子供から実際に聞かれています。その度に「手を合わせるためだよ」と答えます。私が證大寺で働く理由はそのままになります。手を合わせる時間を頂けるといふ事です。その時間で私は過去の過ちに対する反省や謝罪、相対する人への感謝を気付かせて頂けるのです。大それた悪い事はしていませんが、日々の日常で周りの人々を傷つけてしまう事があります。今は南無阿弥陀仏と唱える事で安心して自分を振り返る事ができ、素直に謝罪の気持ちがかかります。そしてお参りの時間は私に命の尊さを強く問いかけてきます。

私の経験談に、当たり前前に産まれてくると思っていた子供を流産した事があります。産むか産まないか悩んだ時期があり、おろすにもお金がかかるし、できた事を後悔してしまいました。でも流産して改めて自分の傲慢さに気付き、今いる二人の子供が健康に育っている事への感謝の気持ちが起きてきました。南無阿弥陀仏と唱え、思い出す事で供養になっていると信じています。

現在の自分の状況を見つめ直すと、母親としても余裕がない時に理不尽にカッとなってしまう事もあります。奥さんとしても旦那さんが寛げて安心できる家庭に出来ない部分があります。そして仕事、ミスが多いです。生きる意味がないと自分を卑下してしまう事がありますが、そんな時にお念仏をしようと思います。お念仏をすると今の自分が逃げているだけだし、まだやれる事、やる事がある事に気が付きます。そのような私ですが、職場ではみんなに温かくご指導頂き、お寺を大事にしている参詣者様からは、私も大事な職員の一人として見守って下さっている事を教わります。皆様のお陰様で私は働く事が出来ているという事に、ハッとさせられています。ありがとうございます。

今、携わっている手紙寺というプロジェクトの事ですが、手紙寺、證大寺の認知を進めています。現在、普段の生活でなかなか手を合わせる時間を持ってない人は多いと思うので、そのような人達にもお参りの元になっている「自分自身と向き合う時間」を手紙というツールを使って考えて頂きたいと思います。最終的には家族に宛てたラストレターを普及させて、生きる道標となる手紙の力を

世の中に広めていきたいです。

友達からもう手紙にも元気をもらったりしますが、亡くなった人からの手紙は自然と頭が下がる力、素直になれる力を持っていると思います。私自身も祖母からの手紙に何度も励まされているので、手紙の力は常日頃感じているのです。

この仕事を私一人では完結出来ないのです、これからも船橋の皆様、プロジェクトの皆様、證大寺の皆様のお世話になりますが頑張っていきたいと思えます。ありがとうございました。

### 船橋昭和浄苑 営繕サービス課 根来輝吉

こんにちは。私は縁あって今年の二月にこちらの船橋昭和浄苑の方に営繕課として採用させて頂きました根来と言います。よろしくお願ひします。こういう人前でお話するのがちょっと苦手で、もう頭の中が真っ白になってしまいますので、書いてきたものを読みながら話させて頂きます。

面接日なのですが、若干名の応募という事である、面接の採用のあれが清掃という事だったので安易な気持ちで申し込んだんですが、その時に十一名も募集に対して来てたんです。それで実際に自分はただ漠然と近いただけだったので、諦めて名前も書かずに立ち去ろうとしたんですけど、一応、その時に受け付けの方に、一応出すだけ出して下さいという事で、私にとっては本当に家に近い以外の、ずっとまあ少しでも仕事の経験もちよっと娯楽施設で掃除の経験だけはあったんで、安易な

気持ちで申し込んだという事なので、宗教的な興味はまるで無かったんです。

でも、義理の父が定年後、大阪の方で十数年間、七十八で、七十八で体があまり動かなくなるようになるまでは地元の霊園の方で掃除や墓地管理などの手伝いでお世話になっていた事はあるんです。でまあ、十年前にその体が動かなくなつてこちら、大阪の方から千葉の自分の方に引っ越して来て同居するようになって、昨年、八十九歳で亡くなつたんです。その時に自分がこちらでおつたので喪主として葬式、浄土真宗の方の葬式をさせて頂いたんで、繋がりが少しはあつたのかも分かりません。

若い頃は生活のために、家族を守るためと言うんですか、それで仕事の方はやりがいとか生き甲斐は二の次、がむしゃらにしてきたつもりだったんですが。定年過ぎまして子供も独り立ちしまして環境も変わったんで、心の余裕というんですか、少し気持ちも落ちついてきて残りの人生を考えた時に、自分が気に入った仕事させてもらいながら、お客様、こちらで言うところ参詣者の方にも喜んで頂けるような仕事やりがいになるかなと思つて。実際に色々な作業をやつていて、参詣者の方にお礼とか時々挨拶の中で色々な「ご苦労様」とか言うてくれる事が、自分にとつても働く事の励みになってます。それで職場も結構和気藹々とさせて頂いて、働きやすいのが魅力という事で。

お話は少し変わるんですけども、若い頃は死など考えた事もなかったんですけども、自分の祖

母や祖父、自分が産まれる前に亡くなっているんで会った事ないんですけども。それにおじやおばが七人、うちの兄弟が七人なんです。もう五十過ぎから六十二くらいまで全部亡くなってしまつて。それでまあ、自分も死に対する不安や恐怖というのを抱いていたんですけども。こちらの方でお朝事とかの時々には法話を聞いたりする機会に恵まれましたお陰で、少しは心穏やかに終わりを迎える事が出来るかなと思つてようになりました。

これもひとえに證大寺にお世話になつたご縁と感謝しております。これからもその感謝の気持ちを忘れずに、参詣者の皆様へ尽くしていきたいなと思つています。以上、私の感話とさせて頂きます。ありがとうございます。

### 江戸川本坊 営繕サービズ課 野田裕子

一月から江戸川でお掃除の仕事をさせて頂いてます野田と言います。今、何か色んな方のお話を聞いて、私は感謝と尊敬がないという事に気が付きました。また、信仰心も薄く、反省の心もないんじゃないかと思つて、原稿を書いたんですけど読むのが何かとても恥ずかしい感じで捨ててしまいたいんですけども。今さらどうしようもないので、この原稿を読ませて頂きます。

私の母ががんになつた事で仏教に出会いました。仏教の事をもっと知りたと思つておりましたところ、證大寺にご縁を頂き、今年の一月よりこちらで働かせて頂いております。

この年まで色々な職場で働いて参りましたが、人間関係で苦勞しないのは初めての事でございます。職場に向かう時に「またあの人に会うのか」と、足が重くなるという事がございません。営繕という慣れない仕事で大変な事もございますが、職員の皆様に優しい言葉をかけて頂くなどいつも心配りをして頂き、これまでやって来られたところでございます。

また、パートという立場であるにも関わらず、毎日お朝事や色々な勉強会などにも参加させて頂き大変ありがたく思っております。

最近では法要の現場にご一緒させて頂く事がございます。亡くなられた方のお人なりなどのお話を伺っておりますと涙が出て困ってしまいます。ご遺族は亡くなった方の話を聞いて欲しいのだと教えて頂きました。気分的に辛い部分もございます。また、私に出来るのか自信がございません。ですが、お寺に求められている事に「話を聞いて差し上げる」という事があって、私にもそれは出来るのであれば、丁寧に向って参りたいと思います。生きている方の力になれば嬉しい事です。

證大寺は今までのお寺にない色々な取り組みをしているところだと思えます。そうした現場に関わっていただける事は私にとって貴重な経験だと感じております。今後ともどうぞ皆さんよろしくお願いいたします。



法  
話  
Ⅱ

五名の方、感話をお聞かせ頂きましてありがとうございます。まだ終わってないって仰っていただいたことも面白かったですね。こういうのはライブのいいところだと思います。良かったとか拍手にはならなかったけど、終わったという雰囲気を受け取られた人は、ああ、良い話だったとか、良い話と言うか、聞いている方も身にしみたとか納得したとかそういう事があったからだと思います。が、しかしそういう反応があったところで「終わります」って言わないで「まだある」って言われたのは本当に良かったなど、そう感ずるわけです。

それから、野田さんは正直な方ですね。最初、開口一番仰ったところが一番感話んじゃないかと思います。皆さんのお話を聞いて自分には感謝と尊敬と信仰心が無いという事に気が付きましたって言って。だからもう、原稿書いてきたんだけどって、どうしようかっていうような事だったですよ。原稿無しでやってもいいですよって言って声がかかったら、それも出来ないの読み上げますって。読み上げた内容は何か、感謝と尊敬なんですけどもね。綺麗事書いたのかな？でも綺麗事で書いたのを振り返って、自分には感謝と尊敬と信仰心がないという事に気が付きましたって言われた後、読み上げられた文章は、感謝と尊敬になってるんじゃないですか。どうでしょうね。

お手紙の話もありましたけれども、自分が普段気が付いていない事や、言語化されていない事が言語化されると、自分は「ああ、こういう事を考えていたのか」って文章を書く事によって気が付く事もあるのですね。どういう事かと言うと、普段は人向きの顔をしていますから。それで人に向か

ってあれこれ向き合って、顔をこしらえたり態度こしらえたりしてるわけですが、感話も人の前で話をしないといけないから、という点では人向きに書かなきゃと思うんですが、書いている時は自分の本音が出てくると、そういう場合がありますね。インド研修旅行で一緒に行かれた方が何人もおられますが、インドの仏跡で感話をされた時も、話をしている内に本音が出てきたりして、言葉にすると、自分がこういう事を考えていたのかという事、気が付く事があると思います。一般にはあまり良い言葉ではないかも知れませんが「問うに落ちず語るに落ちる」って言いますもんね。話してるとその人の本音が出てくるわけです。大体、犯罪捜査の時なんか、そうでしょう。「お前やっただろう」って言ってどれほど刑事が責め立てても「いや、やりました」なんて言わない。しかしながら自由時間で「いや、それにしてもあの日は暑かったなあ、花火がよかったなあ」なんて言ったら、「お前、どうしてそこにいたんだ」ってね。そこからアライバイが崩れたなんていうのがドラマにもあるし、実際に吉展ちゃん誘拐事件の犯人っていうのはそうやって分かったと。その時の犯人がやっぱりこの人だという具合にアライバイが崩れて明らかになったと、そういうのもありますので、やっぱりこうやって感話をなさったという事で大変よろしかったのではないかと思います。

野田さんがもう一回ご自分の文章をまた読み返されたら多分、感謝と尊敬が、自分の気持ちの中にあるなということをもた気付かればいいですね。

ただ、感謝と尊敬が私にはありますよってというのは大体嘘なんです。そこが難しいところです。

私ありますから、感謝してますから、尊敬してますからって言う時はそうでない場合がまたございますので、自分に本当にあるんだろうかという具合に問い返されるところが、実は大事なところなんです。私自身も今日、話を準備してきてないんですね。だから自分から何が出てくるか怖いんですね。そういうこともあります。

それで、準備して文章を書かれて臨まれるのは結構な事だと思っんですけども、それに比べると末廣さんとかそらでスラスラと相当話が出るんじゃないかと。今、原稿なしでお話なさった方、何人かおられましたがよくお話が出来るなあと思います。これは多分、證大寺のトレーニングの陰だと思っんですね。普通ではなかなかこうはいかないです。プレゼンテーションや三分間スピーチとか、一分スピーチとか自分の感じた事をこう一言言う。そういう機会があれば、私どもはやっぱり練習と慣れとである程度お話が出来るようになると思っます。

でも、今度は落とし穴があるんですね。上手に話す事が出来るようになると、上手に話してまとめようという調子で、それで中身がない話になったりするんですね。慣れた人はご注意ください事になると思っます。

文章を書いた方はできるだけ、感話の時は書いた文章であっても話し言葉にしてお話をした方がよいと思っますね。何故ならば、読み上げるスピードが早いんです。生の話は相手の顔を見て「聞こえてるかな」というのを思いながら話します。相手に応じて話すようになるんですね。そこ

にせっかくの感話の機会なので、文章は用意されてもそれを話す言葉としてお話なさると親近感が湧いてよいのではないかと思います。自分の防備が堅い人は、感話の時も文章をずーっと読み上げて、以上、終わりますって言う場合が、私のところの大学でもありまして、生の話をして下さいよ、って私、言うようにしておるんです。

私のところは感話教育というのをやってきた大学なんです。それを参考にして頂いて、證大寺様においてもなされるようになったのではなかったでしょうか。大変結構な事だと思えます。

一般に言われますけど、学校だけが学びの場所じゃないですね。しかしなかなか、学校と違う場所で学ぶっていうのは本当は難しい事ですね。学校で学ぶのは簡単です。それが学校でないところで学ぶというのは大変なんです。でも、その学ぶ気持ちがあれば、何でもかんでも本当に教科書です。あるいは学びの素材ですね。それで、学校の学びだと点数で表されたりしますが、本当のところは点数の評価よりも各人各人が学んだと、こういう事に気が付いたという領きこそ、一番大きな事柄になると思いますし、ですから證大寺様の様々な参拝者、参詣者の方とのふれあいの中でありがとうと声かけて頂いたとかですね。実は文句をつけられる時もあると思うんですけど、まずは「綺麗にしてくれてありがとう」とか「教えてくれてありがとう」とか、そうやって言われればまずは嬉しい事です。本当に良かったなと感ずるところです。

それから、クレームは辛いですけれども、クレームもただ文句をつけられたというように受け取

るんじゃないくて、教えて頂いたかなと、いくとよろしいのではないかと思えます。

ともかく、人は、見つめ合い、語り合いですね。和み合い、それでさつきは一緒にご飯を食べるんだというような事を申しましたが、そうやって仲間として生きていくという事が願いなんじゃないでしょうか。その事を「サンガ建立」と申し上げているんです。ただ、サンガというのは理想的な人間集団の在り方であり、サンガがここにありませんっていうのはそう簡単にいかないと思うんですね。そうすると嘘つき集団になります。みんな仲良しと言うとそれは嘘つきですね。みんな仲良しというグループがあつたらおかしいですよ。みんな仲良しになれない事、抱えてるんですから。だからみんな仲良しとか、これが本当のサンガですなんていうような事は言わずに、サンガを目指して私どもは集い、学び合つてるといふ風に捉えて行くのが、無理がなくてよろしいのではないのでしょうか。

だから感謝し、尊敬しますというのだから、極端に言う感謝と尊敬が無い私とか浅い私だと。そういうところの気付きというのは正直なところじゃないかなと思うわけです。

またお世話になり教えて頂いた方に御恩返ししたいんだという気持ちで勤めておりますという話もありました。こういうような事も大変ありがたい、良い言葉ですね。どういう事かと言うと、その御恩返し出来ました、という具合にはならないという事ですね。御恩返ししていきたいな、そういう事で勤めておりますと。そうしますとまたこう、お参りの人が来た時に「あ、また来た」じゃ

なくて、「あら、おいでになった」という感じになってくるわけですね。

サンガ、和合衆の事と「異なるを歎く」という事、これが一つの繋がりがあるのですねと気付かされるのは、格好の素材として、真宗聖典七六〇ページをご覧を頂きたいと思います。これは「御文」と申します。その蓮如上人が書かれた御文、これが普段お勤めの後、法事後、読まれるわけです。今日は報恩講の勤行の後、御文は読まれませんでしたが、大体はこの御文があるのが浄土真宗の特徴です。普通のお勤めと言うかご宗派の法要の場合、最後の鐘三つ、ガーン、ガーン、ガーンと鳴り、「以上、終わりです」ってなるんですね。それでその後に御文があるっていうのが浄土真宗の、特に本願寺の特徴です。

この蓮如という人は、御本尊に向かって左手が蓮如上人の肖像画なんです。大体この御本尊、阿弥陀仏が立ち姿ですね。まずこの浄土真宗は、立ち姿というのは慈悲の姿、慈悲の心を表しているわけです。居ても立ってもいられないって時に立つという事ですね。心配で心配で座ってました、って事はないですね。心配で心配で、って言うのと立つんです。待ってましたとかっていう場合は立つんですね。お迎えに出ておりますっていう時に座って待っている人はいないですね。皆さんもお参りの方をお待ちになれる時は、座っていてもそのお姿が見えたら立つんじゃないですかね。それは相手を迎えるという事で、この立ち姿っていうのはとにかく、慈悲の心なんです。それからついでに言うと、おつむから光が出ているような形でございますが、絵姿になると画面いっぱい光で

すね。それはあの、闇を破る真の智慧というのを表しています。立ち姿は慈悲の心、それから光は智慧。で、智慧と慈悲が限りがないというので阿弥陀と言うんですね。「阿」というのは否定の言葉、「弥陀」というのが限るなどの意味で、「阿弥陀」と言うとは無限、という事になるんです。それから限るといふ事は量がある、量れるという事ですから、無量と言うとは量れないという事ですね。

その阿弥陀のはたらきに私どもはおはたらきを頂いて、恵みを頂いて生きているんじゃないかと。これを一般では「お陰様」という言い方を日本人はするんですね。お陰様って言った時に「そうですね、私のお陰です」って言う人は「おかしい」ですね。「社長のお陰です」って言って「そうですね、俺のお陰だ」って社長が言ったら「おかしな」な社長ですね。それは陰ながら支えて下さるはたらきのお陰で、ですね。そういうのでお世話になってますって言う時の言葉で「お陰様」と言うわけでした、笑い話になりますが「陰」っていうのは英語で shadow、何々によって言うのは by っつのを付けて「by shadow」って言っても全然通じないですね。日本語独特の言葉です。それでその私どもを支えて下さる命のはたらき、慈悲のはたらき、それから私どもを生かして下さい、気付かせて下さる智慧のはたらき。そういう限らない智慧と慈悲に感謝しますと。そういうのが「南無阿弥陀仏」という言葉の意味なんです。南無」というのは頭が下がります、尊敬します、従います、敬います。そういうような意味です。それで「南無阿弥陀仏」という言葉は「大いなる命に感謝します」とか「大いなる智慧に頭が下がります」とか、そういう意味なんです。ですから縮

めて言う「ありがとう」という事だという事も、このお席で申した事もあると思います。

ありがとうは日本語ですけれども、南無阿弥陀仏と言えば世界共通語ですね。古いインド語で仏教徒はみんな知っている言葉です。それで南無阿弥陀仏は称えていると「なんまんだぶ」になるんですね。「なんまんだぶ」で結構です。却って「なむあみだぶ、なむあみだぶ」ってそんな力まない方が、南無阿弥陀仏という言葉にはかなってますね。だって、ありがとございますから。お陰様です、「お陰！様です！」と、こういうのは無理なんです。 「どうも！お陰様で！」って。やっぱり力が抜けて本当に「ありがとございます」になるし、「お陰様です」ですから。「南無阿弥陀仏」も楽に唱えればよろしい。そうすると「なんまんだぶ」になる。歯があってもなくても「なんまんだぶ」は出来るって、これも申し上げておきますね。何を言ってるんだって言われるかも知れませんが、年齢制限が無いって事なんです。みんな平等って事です。そういうので南無阿弥陀仏のころを伝えてくれたという人はというと、まず右手に親鸞、左手に蓮如という具合に絵をかけて、南無阿弥陀仏の歴史伝統を表してるわけなんです。

それで今、蓮如という方はどうして絵姿をかけられるようになっていたのかと言うと、私どもに南無阿弥陀仏の心を伝えて下さったからだ。その時に取られた方法が手紙文の形で教を示して下さい、というのが蓮如上人がなさった事なので、親鸞聖人の没後、御文と言って一五〇年くらいも経ってから生まれたのが蓮如上人で、時代はもう室町時代の人なんです。親鸞は鎌倉時代の

人ですから。そして、時代が少し隔たりますと、人情、気質も変わります。ですからその時代の人の言葉で、その時代の人の心になつたように、教えのころっていうのを説いて下さった、そういう人が蓮如上人なんですが、三六〇通くらいも蓮如上人の御文は残ってるんですけど、このように真宗聖典には整理されて八十通収められております。そして、これは五冊の御文からなり、聖典七六〇ページの最初を見ると「第一帖」って書かれていますね。これ、一冊目っていう意味です。五冊が編集されてこの聖典の中に収められてるんですね。で、一帖目の第一通というのが、「ある人いわく」っていう具合に始まる御文です。普段あまりこの文は読めない御文だと思います。大体は毎日の朝の勤行の後に一帖ずつ順番に読んでいくというのが習慣でございまして、そうすると八十通ありますので、大体年に四回から五回、御文というのはぐるぐる、順繰りに読まれるという事なんです。なかなかそこまでなさっているお寺もご門徒さんも少なくなってるかも知れませんが、基本はそういう事です。まあとにかく教えのころを味わうという風に通りは目を通して頂ければいいと思うんですけれども。何もしなければ分かりませんから。だからたまにこう聖典を開いて、お読みになったりすればどういふものかというのはある程度分かるし、拒否感も消えていくんじゃないかと思えます。それで「ある人いわく」という文章ですね。

「ある人いわく、当流のころは、門徒をばかならずわが弟子とこころえおくべく候うやらん」

門徒っていうのは、「門」は教えの事を表します。「徒」は生徒の徒ですね。ですから教え子と、  
という事です。教え子を必ず俺の弟子と心得るべきか、

「如来(によらい)・聖人(しょうにん)の御弟子(おんでし)ともうすべく候うやらん」

「如来」と言うと大体は釈迦如来、あるいは阿弥陀如来のことです。如来の「如」というのは悟りの世界、悟りから来る、悟りから表れるというので「如来」と言うんですね。「仏」と同じ事を指しているんですが、仏は目覚めた人、目覚めのはたらき。

それでその目覚めるっていうのは真の道理に目覚める。その真の道理の方が「如」、如から表れて来て、という事は如を教えるために、導くために表れてくる。そういう時にこの「如来」っていう言い方を特にするわけですね。それでとにかく如来と言ったらまず釈迦如来と申しますか、釈迦如来や、「聖人」は親鸞聖人の御弟子と申すべきなのか、

「その分別を存知せず候ふ。」

と。分別って言うのは大体はその、分かるという事なんですけどね。分別を存知せず候ふ、って言ったら、その違いが分かりません、という事なんです。どちらかが正しいのか。つまり、門徒を俺の弟子と思ふべきなのか、釈尊や親鸞聖人の御弟子と思ふべきなのか、どっちなんです。という。そういう質問です。それからその後、

「また、在々所々に小門徒(しょうもん)をもちて候うをも、  
在々所々というのはあちらこちらに。小門徒っていうのは少ない人数の教え子達をもっておりますのを、

「このあいだは」

このあいだはというのは、最近、近頃はという事です。

「手次(てつき)の坊主(ぼうず)には、あいかくしおき候うやうに、心中(しんじゆう)をもちて候う。」

手次の坊主の、坊主というのは今は悪い言葉ですけれども、元々は宗教施設の主の事なんです。坊主ってというのは。だから大体は教団幹部っていう事になるんです。手次というと直上、直上の上司っていうような言い方ありますね。その直上の教団幹部には隠しておくように心の中でもっていません。何故でしょうか。これはつまり、上納金の問題ですね。教え子がたくさんいれば、たくさん上納金を出さなきゃいけないと。少しだと言ったら少しで済むと。だから小門徒の数を隠しておくというように思ってるんですが、これもそうであってはならないと。

「これもしかるべくもなきよし、人のもうされ候うあいだ、」  
人が申されるので、

「おなじくこれも不審（ふしん）千万（せんばん）に候う。」

これも疑問であります、と。

「御ねんごろにうけたまわりたく候う。」

こうやって問いの形で出されてます。非常に正直な質問ですよ。普段なかなかこういう質問は、ほとんど出ないんじゃないかと思えます。そして、

「答えていわく、」

今度は答えなんです。

「この不審(ふしん)もつとも肝要(かんよう)」

肝要というのは大事な事、だと思えます。

「かたのごとく耳にとどめおき候う分(ぶん)、もうしのぶべし。きこしめされ候(そうら)え。」

かたのごとく、とはこのように。耳にとどめおいてるというのは、聞いておきますところを申します。きこしめされ候へ、どうぞお聞き下さい。

「故聖人のおおせには、「親鸞は弟子一人ももたず」とこそ、おおせられ候(そうら)いつれ。」

故聖人とは今は亡き聖人。誰の事ですかと言うと「」の中に親鸞とありますから、親鸞の言葉な  
んです。今は亡き聖人が仰せられたところでは、親鸞は弟子一人ももたずとこそ仰いましたよと。  
どこにあるかと言うと、これが『歎異抄』にあるわけでございます。

『歎異抄』の第六条。この七六〇ページはまた後で見たいと思うんですが、『歎異抄』の第六条と  
言うのと六二八ページです。六二八ページの後ろから四行目に、「専修(せんじゆ)念仏(ねんぶつ)のと  
もがらの、」という文章がありますが、その後の行に「親鸞は弟子一人ももたずさうろう。」とあり  
ますね。この言葉を御文にあげているわけです。

そこで、もう一度七六〇ページに戻りまして、親鸞は弟子を一人ももっておりませんと仰ったん  
ですよ。でも実際は親鸞聖人はたくさん教え子がいたわけです。それでその教え子の努力によつ  
て時代を通してずっと親鸞の教えというのは伝えられてきたわけです。教え子がいないわけが  
ないですね。それなのに親鸞は弟子を一人も持っておりませんと言ったのはどういうわけかと言  
うと、弟子の取り合いという浅ましい事が行われているという事を歎き批判して、親鸞は言われたん  
ですね。これが『歎異抄』の第六条のところ、その「専修念仏のともがらの、」というその後のと  
ころに、わが弟子、人の弟子という相論があるという事はとんでもない大間違いだ。で、親鸞は

弟子を一人も持っておりませんと。こう言っているわけです。

その事について蓮如上人は取り上げまして、故聖人というのは、今は亡き先生って言う程の意味なのでですね、本当は直に会ったような感じの人でないとなかなか言えない言葉なんです。だから時代は隔たっているけど、親鸞を非常に近く感じている人の文章だという事になると思います。そして、弟子を一人も持っておりません。

「そのゆえは、如来(によらい)の教法(きようぼう)を、十方(じつぼう)衆生(しゅじょう)にとききかしむるときは、ただ如来(によらい)の御代官(おんだいかん)をもうしつるばかりなり。さらに親鸞(しんらん)めずらしき法(ほ)をもひろめず、如来(によらい)の教法(きようぼう)をわれも信じ、ひとにもおしえきかしむるばかりなり。そのほかは、なにをおしえて弟子といわんぞ」

と、大体意味は見当がつくでしょうか。如来の教えを十方衆生、人々に説いて聞いてもらう時は、ただ如来の代官をするだけです。代官と言うと今はイメージが悪いです。悪代官、悪奉行と言っていますね。「越後屋、そちも悪よのう」「お代官様」とか何かそういう場面がありますし。でもこれは元々、代行というような意味なんです。公の業務を代行するという事。つまりその、中央政府の意向を地方において実行していくというのが代官と、言っていただけの事なんです。つまり自分が

支配者というわけではないって事ですね。領主というわけではない。自分はその代行しているのであると。じゃあ主人は誰かと言うと、つまり阿弥陀如来という事になりますよね。あるいは釈尊という事になると思います。「さらに親鸞めずらしき法をもひろめず」と言うのは、「さらに」と「ひろめず」ってまったく広めませんという事。親鸞はめずらしき法をひろめません。めずらしいというのは珍奇な、特殊な、という意味ですね。特別な法を広めるわけではありません。「如来の教法を」、如来の教えの道理を自分も信じるし人にも教え聞かせるだけです。その他は何を教えて弟子と言いましようか、言うわけがありません。こうやって親鸞は言われた人ですよと。

「されば、とも同行(どうぎょう)なるべきものなり。」

「とも」って言うのは友達という事ですね。「同行」と言うのは同じく行うという、仲間です。

「これによりて、聖人(しょうにん)は御同朋(おんどうぼう)・御同行(おんどうぎょう)とこそか  
しずきておおせられけり。」

「かしずく」と言うのは跪くという事。目線が下なんです。下からこう、上に見上げるような形

がかしづく、ですね。大体、聖人と言うと上から目線で見下ろすのが聖人かという具合に思われがちなんですけれども、親鸞という人はそうではなくて平等の目線、あるいは相手を尊敬する、そういう目線でお話になったということです。

今はこうして多くの方が集まって座っておられる前で、私の顔と姿を見て頂くためには私、立っておりまして、上から目線で見下ろしているという具合にお思いにならないように、出来ればお願いしたいです。とにかく仕えるようにして仰っていたのが親鸞聖人でありますと。そして、「御同朋・御同行」と言うのがつまり、和合衆という事ですね。同朋というのは同じ友、それから同行というのは同じ行、ということなので身近に言うとは友達という事です。仲間だという事です。これが和合衆の事でございます。

例えば四国お遍路巡りの人々も、傘に同行二人って書いてる傘をかぶって回るんですね。その時の同行二人というのは自分は一人数でしよ。もう一人、一緒に行ってくれてくれるっていうんですね。それは誰かって言うと弘法大師なんですね。それが真言宗の人の四国お遍路参りする時の気持ちでございます。だから弘法大師っていう方も非常に身近に、真言宗のお遍路参りをする人は感じておられるわけですよ。それが今度は同行二人どころじゃない。同行が何人もいるってなると御同朋・御同行という事になるわけでございます。

それで、これを和合衆を目指していくというために、親鸞聖人の言葉をあげたのが蓮如上人だと

いう事だと思っんですね。つまり「とも同行(どうぎょう)なるべきものなり。」と、「かしずきてお  
おせられけり。」と。

その後も見ていくと、

「されば、ちかごろは大坊主分(だいぼうずぶん)のひとも、」

って言うのは教団幹部、地方のボスのことです。

「われは一流の安心(あんじん)の次第をもしらず、」

安心して言うのは信心と同じ事です。教えを受け取るというその事を知らないで、

「たまたま弟子のなかに、信心の沙汰(さた)する在所へゆきて、」

信心の沙汰をするって言うのは、つまり仏教の話ですね。仏教の話を聞いて、仏教をどのように受け取るかという事を語り合うような場所へ行つて、

「聴聞(ちようもん)し候うひとをば、」

聴聞する人を、

「ことのほか説諫(せつかん)をくわえ」

これは字が特にせめるっていう意味で「説諫」と書いていますが、また意味的には体罰を加える折檻ですね。それで意味が通じるわけです。で、

「あるいはなかをたがいなんどせられ候うあいだ、」

仲違いをさせる、つまりそういう場所に行つてはいかんといい具合にして、仲を裂くというような事をするので、

「坊主(ぼうず)もしかしかと信心の一理をも聴聞(ちようもん)せず、また弟子をばかよりにあいささえ候うあいだ、」

邪魔するので、

「われも信心決定(けつじょう)せず、弟子も信心決定(けつじょう)せずして、一生はむなしくすぎゆくように候こと、まことに自損損他のとが、のがれがたく候う。」

自分が傷つくだけではない、他人を傷つける、そういう間違い、罪ですね。それが逃れがたい事ですと。そして「あさまし、あさましと。」こういうところの文章があるので、あまりこの御文は儀式の時に読みにくい御文なんですよね。何でかと言うと、読んでもる人が坊さんですから。そうすると「坊主も」なんて言うのと、それでまた教団の揉め事と言うか、あつてはならない在り方というのを説いてありますので、読みにくいという事で、あまり法要の時には読まれないわけでございます。それでもまあ、せっかくですからその後も続けていくと、「古歌にいわく、」って言うのは古い歌に言っていると。

「うれしさを　むかしはそでに　つつみけり　こよいは身にも　あまりぬるかな」

これは、その時代の人はずいぶんと知っている話だったようなんですね。我々で言うと、例えば田中角栄さんが総理大臣になった時に、とても胸張って喜んでましたよってというような話はまだ一応、田中角栄を知らなくても大体分かる時代じゃないかと思うですね。沖縄返還の佐藤栄作の次が

田中角栄ですから。そんなような雰囲気で、この歌は太政大臣になった人が喜びに詠んだ歌だっという話なんですね。昔は袖に嬉しさを包んだ。今は嬉しくて体から溢れ出るほどだと。嬉しさが。という歌なんです、それを教えの道理を述べる文章に使って、それで、「うれしさを　むかしはそでに　つつみけり」

言うのは、

「むかしは、雑行(ぞうぎょう)・正行(しょうぎょう)の分別もなく、念仏だにももうせば、往生するとはかりおもいつるころなり。」

漠然とただ南無阿弥陀仏を言っていたと。

「「こよいは身にもあまる」といえるは、正(しょう)・雑(ぞう)の分別をききわけ、一向一心になりて、信心決定(けつじょう)のうえに、仏恩報尽(ほうじん)のために念仏もうすころは、おおきに各別なり。」

これはつまり、南無阿弥陀仏というのはどういう事かと。私のために願って立てられた念仏の願

いである。それは私に向けられたものだという具合に受け取って、ありがとうございますという気持ちで南無阿弥陀仏を申すという事。これはおおきに格別であると。同じく南無阿弥陀仏と言ってもですね、意味分らない。やる事になってるからやるって言うのと、大いなる命に感謝します。私を生かして下さってありがとございましたというような気持ちで唱えるのと同じ南無阿弥陀仏でも全然違いますもんね。

ぼさーとした顔とか愚痴くさい顔と、それから喜んで明るい顔になって唱えるのと、全然様子が違います。そういう事で、

「かるがゆえに身のおきどころもなく、おどりあがるほどにおもうあいだ、」

思うので、

「よろこびは、身にもうれしさが、あまりぬるといえるところなり。」

こうやって、「あなかしこ、あなかしこ」って手紙の結びの言葉なんです。これが文明三年七月十五日だ。こういう日にちが書いてありまして、それで文明三年七月十五日ってのはどういう日

かというのをまた見てみますと、真宗聖典の後ろの方に年表がありまして、文明三年と言うと、もうずっと、年表の一番終わりの方なんです。一一四二ページ。文明三年っていうと、下の段の五行目。「蓮如、越前吉崎に坊舎を建てて。」と、こうあります。越前というのは福井県ですね。蓮如は本願寺の人ですから、京都にあったはずなんです。京都は東山の太谷というところに本願寺があったんですが、それが徹底的に二回も破壊されて、そして蓮如の命が狙われるというような事まであって、それで蓮如は近江国からこの越前、福井県と石川県の境目が吉崎というところに移動して、宗教施設を建てた。簡単に言うとお寺。聞法道場を建てた。その時に書かれた御文がこれなので、こういうお寺をこしらえていきます、と、こういう集いをもっていきます、と。そういう事なんです。そういう事になるんですね。つまり「御同朋・御同行」の集いを開いていきます、という事なんです。そこでキーワードになっているのが「親鸞は弟子一人もたず」っていう言葉なんです。同時に門徒を俺の弟子だと心得て所有物のようにして人を支配するという過ちが行われている。その事があるてはならないと。あつてはならないという時に、しかしながらただ馬鹿にして否定するんじゃないくて、如来・聖人の御弟子だという道理なんだから、道理にちゃんと気が付いて、間違いに気が付いて立ち直ってもらいたい。そういう事で歎きの気持ちというのも含まれているでしょう。それで「歎(たん)異(に)」という「異(こと)なるを歎(なげ)く」という、そういうのがサンガを建立していくというのと繋がっている事だという事を思うわけでございます。

そもそも、『歎異抄』という「異なるを歎く」という言葉は、『歎異抄』の序文にございます。そこで、もう一回、『歎異抄』の方を見て頂くと。六二六ページ、『歎異抄』という題目があつてその後がこれ、漢文ですが全部脇に平仮名が書いてありますからその通りに読めば読めます。平仮名の通りに読むと

「竊(ひそ)かに愚案(ぐあん)を回(めぐ)らして、ほぼ古今(ここん)を勘(かん)がうるに、先師(せんし)の口伝(くでん)の真信(しんしん)に異(こと)なることを歎(なげ)き、後学(こう)相続(こう)がくそうぞくの疑惑(ぎわく)あることを思(おも)うに、幸(さい)わいに有縁(うえん)の知識(ちしき)によらずは、いかでか易行(いぎよう)の一門(いちもん)に入(い)ることを得(え)んや。全(また)く自見(じけん)の覚悟(かくご)をもって、他力(たうりき)の宗旨(しゅうし)を乱(みだ)ること莫(な)かれ。よつて、故親鸞(こしんらん)聖人(しょうにん)御物語(おんものがたり)の趣(おもむき)、耳(みみ)の底(そこ)に留(とど)まるところいささかこれをするす。ひとえに同心(どうしん)行者(ぎようじや)の不審(ふしん)を散(さん)ぜんがためなりと云々。」

仮名を読めれば全部読めますね。漢文の脇に書いてるんですが、別に返り点、送り仮名使わないですつと平仮名の通りに読めばこの文章です。

それでまあ、こういう表記の仕方は今はあまり行われませんが、昔の文章の場合こうやって漢文に習熟しなくても読めるようにと、こういう表記の仕方が多く行われていたんですね。

そこで、「歎異」という言葉は、これが異なる事を歎くっていうんですね。これ、異なる事を歎くっていう、異なるものを排除するんじゃないでなくて、異なるものをやつつけてしまうっていうんじゃないでなくて、歎くっていう、この歎きに注目しますと、これは相手の事を思っただけで切り捨てる事ができない。何とか立ち直ってもらいたい。そういう気持ちで歎くっていう、そういう事ですね。

大体は歎くというのは、相手の事を思っていないと歎けないんです。具体的な例で言うと、子供が失敗した時に親と一緒にあって歎く。そういうのは愛があるからですね。あるいは教え子が間違った時に先生と一緒にあって歎く。そういうのは教え子を愛しているからですね。その愛するっていうのが欲望、煩惱で愛するというのはなくて、相手の事を思っただけで愛するっていうのは慈悲です。仏教用語のキーワードになりますね。

そういう異なる事を歎くという親鸞聖人の言葉を整理したのが『歎異抄』の前半部分なんです。それでまた『歎異抄』の第六条、親鸞の言葉なんです、親鸞の言葉にもやっぱり歎きがある。弟子の取り合いしちゃいけない。しちゃいけないのに何でするんだと。そういう事についてきちんと道理を分かって立ち直ってもらいたいと。そういう歎きのところにおいて人は和解が出来るんじゃないのかと。和合が出来るんじゃないのかと。こういうような事なのでございます。

それですので、私は正しく良く生きていますよという人は却って怪しいものでありまして、私は自分自身としてですね、胸に手を当ててみればやっぱり色々と迷惑をかけてきたし、必ずしも正しくない。そういう事ばかりの自分なんだと。そういう事についてばれなきやいや、じゃなくて、自分自身の事は、自分は誤魔化す事は出来ません。また、もしも仏様に向かつて手を合わせてみれば、それこそ手を合わせたお陰さんで自分自身の事が気付かされてくるわけなんですよね。そういうところにも人同士が共感して、それで手を取り合えるというところも辛うじてあるんじゃないかと。利害で集う人は、利害が合わなくなるとすぐ別れてしまうんですね。そうでないところの人というのは出合いが、本当の出合いがあるんじゃないでしょうか。

人間疎外状況がどんどん進んでおるこの現代社会の中で、やっぱりお互いに手を取り合って協力していくんだと。そういう社会になっていかなきゃいけないのであります、そういう点で歎異の精神、それから和合衆の心というものを大事に保持して、そしてこれを公開していくという事は、これは本当に世界のため、社会のための大事な事なんです。その起点としてこの私どもの今ご縁の證大寺があるんだと、こう認識して頂ければ久遠の働き場所というのは随分と甲斐があるという事になるのではないのでしょうか。

同じ仕事でも嫌々やらされると本当に辛いですね。意味ないもん、なんて言うのと奴隷労働なんです。それが、意味ある仕事が出来ているのだと。それはお給料の面では色々気持ちもあるか

も知れませんが、それでもとにかくこの大事な仕事をやっているのが、やってあげる、じゃなくて、やらせてもらっている。おまけにそれに毎月、月給日に給料が入るって何て良い事だと。それぐらいにもなりませんかねって言うと「三明くん、それほど甘くないよ」って言われるかも知れませんが、ともかくも意義ある役目をささやかながら果たして、果たさせて頂いているんだというところにはとにかく喜びがあるじゃないでしょうか。そういうので今日のご縁があるという事でございます。時間ですので一回ここで切らせて頂きます。どうもありがとうございます。

感話テーマ

「なぜ證大寺で私が働くのか」

# 職 員 感 話

大塚 祐子

丹治真希美

伊藤 篤志

大島 健一

## 職員感話

### 業績推進室 大塚祐子

こんにちは。法人推進課の葬儀を担当しております大塚祐子と申します。よろしく願いいたします。

感話をさせていただきます。今回ですね、私が感話をさせていただくのにどういった内容を話そうかなという風に考えたところ、私の大切な先生のお話を少しさせていただきたいなと思って感話とさせていただきます。

その方は種村健二郎先生と言いまして、仏教人生大学でも「死ぬ苦しみからの解放へのみち」という講座を月に一回、銀座で開催をしています。その先生のお手伝いをしていますが、その講座の少し前から出会いがあり、先生のお話を聞かせていただきました。ただ、その先生のお話を聞きたいという気持ちはとても大きくあったんですけれども、心構えが足りなかったところがたくさんありまして、いつも皆さんにご迷惑をかけたり、皆さんにお手伝いをしていただいたりして、最近に住職からも色々と指導されて、どうしたらこれから一緒にやっていけるのかということもお話をさせていただきました。

種村先生のお話というのは、「人間一〇〇%皆さん死ぬ」ということにテーマをあててお話をいた

だいておりますので、やはり私も大切な人を亡くした身として、それを実感することもありますし、大切な大切なお話だと思ひまして、毎回お話を聞かせていただいております。

そして、そのお話を聞いて、證大寺にいて、皆さんと同じ方向に向かってお話を聞いて、その願いを考えていきたいと思つて常々先生のお話を聞いていますが、まだまだ足りない私がおります。

その講座での先生のお話は毎回毎回色々大切なことをお話いただいているんですが、先日先生から当たり前のことが当たり前でなくなった時に苦しみが始まりますよ、というお話を私はいただきました。そして、それが私には今だに忘れられないお言葉になっております。やはり当たり前という言葉が本当に日常どこにでもあつて、私も一日一日過ごしていても当たり前で普通だ、普通だと思つていたことが、ある日突然それが当たり前ではない本当の幸せだったということを感じることも、二年前大切な人を亡くした時に実感をしました。そういった大切なお話を先生からいただいているのにも関わらず、私の心構えが足りないために、皆さんと違う方向を見てしまつたり、違う方向に考えが及んでしまつているところがあり、まだまだもつともつと先生のお話を聞きながら、勉強していかなければいけないことだと私は感じております。

ここの證大寺にすることはなぜだ、ということを考えてところで、阿弥陀様の教えのもとで、私がよく話しているばあばの「なんまんだぶなんまんだぶ」を唱えながら、その意味を色々と考えていって、皆様と同じような方向を向いて、しっかりと生きていかないといけないと私は考えており、

そこに生きていくために私はこの證大寺で働いていると私は考えております。以上で感話とさせていただきます。ありがとうございます。

### 業績推進室 丹治真希美

私は広報を務めさせていただいております丹治と申します。

なぜ證大寺で私が働いているのか、それを自分自身に問いかけてみました。ちなみに私は夏以来こちらに来させていただいているまだ新参の身でございます。

そこで、自分に問いたところで自分の中から勝手ながら出てきましたところの事柄をお話させていただきます。それは大きく三つございました。

一つめが、證大寺の想いを表現し、伝えてくこと。伝えるためです。證大寺の想いとは、證大寺のもちろん願いでもありまして、さらに皆様が色々と働きになるところで、具現化しましたところのものとことがあります。具体的には住職の想い、メッセージ、それから、供養の在り方、そして手紙処、浄縁墓、安堵、仏教人生大学、その他終戦記念日のイベントであるとか、こちらで色々やっております様々な活動やアクションです。そして全てが私から拝見させていただいて、他のお寺にない、実に新鮮で、チャレンジで、ユニークで、そして熱い想いに溢れたものだなという風に感じております。

それを世の中の人々に向けて分かりやすく、そして印象深く、さらにそのエッセンスを損なうことなく的確に、時々ドラマチックに拡大して表現して伝えていく、それが私のこちらでのお役目だと思っております。

実は入った初日から私はこの作業におきまして、特にこの文章に落とし込むという作業が非常に多いんですけども、この上で非常に不思議な作業の感覚をしているのですが、実はその、上から何かこう滝のように落ちてくるものを、私の体を伝って、私はただただパソコンを使ってそれを落とし込む作業をしている、そんな感覚なのです。そこにおいて、自分の力を使っている感覚がないのです。もちろん頭も使っていない。何を使っているんだろ。実際にその作業をそのものですね、私にとつてもものすごく気持ち良くて、何か自分自身が浄化されるようなそんな不思議な感覚があります。

こういった話をする、何かオカルト的な話をしているのかなと思う方もいらっしゃるかもしれないんですが、私は非常に僭越ながらこれをこのように理解しているのです。これは、他力かな。本当に、證大寺の想いというものに動かされて、そしてこのように作業が出来る、自分の力ではない、他の力で。たまたまその作動しているのが私だという話だけで、本当にそれはたまたま私だったというだけなんだろうなって本当に感じるんですね。

そして二つめなんですけれども、二つめのなぜ證大寺で働いているか、それは、感謝と尊敬に溢

れた自分に目覚めるためです。先程の他力で私の体を伝わって落とし込んで出したものに対して、住職はいつも「ありがとう」と本当に私に言ってお下さるのですね。さらに田村執行役ほか、そこに直接関わる皆様も「ありがとう」っていう言葉を本当に私に下さって、実はこれが私にとっては新鮮で、本当に初めての経験なのです。実は私はこちらに入りますまで数十年、一般の会社というところで紆余曲折ながら働いて参りましたけれども、そこで私なりに成果を、そこそこ出すところはあった人間だと思うのですが、「ありがとう」という言葉を言ってもらった記憶がほとんどないんですね。まあ、上司に良くやったねって言われれば上等な方でして、下手すると陰で同僚か何かからはですね、ありがとうどころか、「あり得ない」、「あの女が」、「生意気だ」、そんなような事を多分に言われていた自分だという風に感じていきます。そんな私が入ったここは、感謝の言葉が溢れる別世界です。

ちよつと別の話にそれるんですけど、私は人間ウォッチングが癖なんですけど、実は住職のことも良くウォッチングをさせていた দিয়েまして、ちよつとルポなんですけど、住職はランチで入ったうどん屋さんとか、乗ったタクシーとか、その運転手さんとかレジの方とかでも、お水を出してくれた方でも誰にでも「ありがとうございます」と実にきちんととてもこう美しい発声で、相手の目を見てきちんとされるんですね。私のもう一つの癖が人の真似をすることなんですけど、この真似をしまして私もちよつとしたところで、今まで実はそんな風に言っただけなんですけど、「どうもあ

りがとうございます」ということを多発するようにちよつとなりました。お昼に行ったランチタイムのその店の店員の方とか、それこそ雨の日に短い距離を乗ったタクシーの運転手さんとかに、そのように「どうもありがとうございます」という風に真似をして言うように心がけているんですね。もうそれまでは、「あ、どうも」とか「すいません」という風な手短にちよこちよこ言っていたようなところをきちんと言うようにしてみたところ、こんな発見がありました。私の中から、相手の方への尊敬の念が溢れてくるんです。

先日もつい二、三日前ですけども近くのとんかつ屋さんでランチを食べに行つて、全部食べ終わつて、全部下げられたのに、それでもお茶のおかわりを持ってきて下さる店員さん、「ありがとうございます、ございます」、なんて素晴らしい心遣いをしてくださるんだらうと本当に尊敬しました。例えばこういう時のタクシーなどいつも乗つていても、ちゃんと目的まできちんとして届けてくれる、そういう方がいるから私も疲れないで、重い荷物を持ってもちやんと届けられてありがたいなという、本当に尊敬をする、良い職業をしてくれる人がいてくれて、走つてくれてと、そういうことで、今まではあつて当たり前前、サービスされて当たり前前だということは無かつたのだと、そう思っていた自分が恥ずかしくなりました。また、そのようなことがあるのは、非常にありがたいことがそこで起こつているという、全てありがたいことだったということも感じました。また、そうしたところのお相手の方に「ありがとうございます」とお伝えする、その時点で相手の方がにっこりと笑顔で返して

下さった時に、何かそこに一体感を感じるんですね。何か世界が丸く温かくなったような感じもします。私がこうしてこちらで感謝と尊敬の念に目覚める自分というところは、もしかしたらこれはその、私にとっては何か素敵に世界が見える眼鏡を掛けたような感じがするんですね。この眼鏡は一生外さないで掛け続けていようという風に思いました。

そして最後、三つめのなぜかということになりますが、それは「ご縁」と思っております。これまで私は友達の中で話す時に「なんでそこに行ったの」とか「どうして」ってなった時に「そういう縁なんじゃない？」とか「縁でしょ」みたいな、縁という言葉をご縁という言葉を非常に軽く使っていたんですが、今ここで三つめの訳として申し上げます「ご縁」は、それよりもバージョンアップしているつもりでございます。それは、ここで仏教というものに触れさせていた দিয়ে、三明先生の『歎異抄』の講座なども何度か拝聴しておりますうちに、私なりに掴んだ意味のご縁です。色々な条件が整い、なかなかあり得がたいことがそこで起こって、このように結びついて、そこに他力が働いて、不可思議な最後がありというところで、ここにいる「ある私」というところがご縁の賜物だと思っております。

さっきの二つの言葉もご縁の上になりたった事象だと感じております。

以上となりますが、三つの事お話をさせて頂きました。私はですね、夏以来ここにおりますまさに門前の小僧でございますので、こうした『歎異抄』等からの、仏教のお言葉も非常に解釈違いの自

分勝手な解釈でお話をさせて頂いたところが、本当に多々あると思いますけれども、それに関しましては後程三明先生からお叱り、ご指摘のお言葉を心してお待ち申し上げるところでございます。どうもご清聴ありがとうございます。

### 森林公園昭和浄苑 営繕サービスク 伊藤篤志

森林営繕の伊藤篤志と申します。證大寺にご縁を頂いて九年目、ここに俺がいるのはご縁ではないのかなって思います。その一言になります。感話すると大体いつも同じことに今を去ること九年前、人生のどん底を味わいました。人間関係やら金銭的な問題から色々なことでどん底を味わって、そこで求人広告のGATENという雑誌、今はなくなりましたが土木系の有力誌で求人広告を見て、たまたま宗教法人證大寺が載っていました。他にも建築関係とかは給料も良いところはあるのですけれども、そこで何だか分からないけど自分の精神的なものですかね、求めていたっていうのか、宗教法人證大寺が目にとまりました。自分その時は横浜に住んでいて森林公園は埼玉、距離は遠いですけれども、そこまで面接に行ってみようかなという気持ちになりました。ここでいつもの話が出てしまいますが、その時四十歳ちよつと。證大寺に面接に行くと言った時、親父もついていくと。四十過ぎの男の面接に親父もついていくと。ふざけるな、来ないでくれ、勘弁してくれと言ったのだけど、やっぱりついてきちゃいました。そして、下のでかい駐車場で待っていてそれまでは

親父とは本当は仲がどちらかと言うと悪い：良くない方だったと思います。そこからは何か：急に仲が深まったのかなと。それから間もなくして親父が亡くなって、二年前に七回忌がありました。もしかしたら霊感がある方はこの辺に親父がいるの見えるのかな？證大寺に親父と共に一緒に勤めているんだと、それを考えると縁でしかないと思います。

やっ自分も九年、今まで勤めてきて、この證大寺で勤める意義というのを考えて、後付でやっぱり：お参りされる参詣者のために苑内を綺麗にして「ありがとう、綺麗になってますね」と言われると嬉しいなというのが、そういうことなのかなと思います。先日あの三明先生の聞法会で、座談会に出させてもらって、證大寺ってすごい事をやっているんだよって言ってくれたんですよ。すごい事、すごい事なんだよって、他ではやっていない、それを職員一人ひとりが分かっているんじゃないかと。ああ、そうなのか。そうなのかもな。その時は少しだけ分かったような気持ちで、それからはやっぱり聞法：やっぱり色々大切だなと思ひ、そういうことがあると車の運転にも出てくるんです。いつもは自分が車で割り込む方だけど、今度は割り込んでもいいよ、「どうぞどうぞ」っていうような運転をしたり、つい先日も高速道路で車停めて後ろから追突させて死亡事故、そんなのが最近多いですけど、そういう人達にこそこういう仏教とかこういう場を知っていればまた違う環境になったのかなというのがあって、あんちよこみたいなのが無いから全然上手くまとまっていないんですけど、何かそういう人達にこそ、そういう人達にもこういうのがあっていうの

が分かってもらえればと。

だから自分が勤めている意義は縁であり、そういう人達で聞法を広めていきたいっていう證大寺、そこに参加させてもらって、一番手っ取り早いのは、職員、パートさん、うちの職員みんなですね。一人ひとりが聞法の大切さとか、必要性みたいなのが分かっている、本気でこういう報恩講ですか、このような聞法会、強制じゃなくて自分から出ていきたいというような環境になるような、環境になればいいと思います。すみません、以上です。ありがとうございました。

### 船橋昭和浄苑 営繕サービス課 大島健一

船橋営繕の大島です。

伊藤さんが見られた求人誌のGATENなんですか、リクルート社から出しております、実はあの写真のモデルは僕なんです。当時僕は微妙な坊主頭で、変な寝癖があつて、突然大島君モデルになつてくれと言われました、それである載つて、したら伊藤さんが来てくれて、まあ求人載せる時にあの、井上住職と、鈴木先生、師匠なんです、大島君をサポートしてくれる人もう一人増やそうという事で求人を出して、伊藤さんが来てくれて、僕は埼玉に六年いまして、船橋の方に異動し、五年経ちまして、證大寺のお世話になりました。十一年目になります。證大寺に入りまして子供を一人授かり、二人授かり、つい今年の五月に三人目を授かりまして、男の子三人、賑やかな家庭

です。

「なぜ證大寺で働く」っていう今回のテーマなんですが、僕はあの緑が好きでして、これからの季節は、十一月になりますと霜が降りて、竹を採取出来る時期なんですね。霜が降りて水を吸わなくなるんですよ、竹って。そうすると竹を切って、例えば竹焼きにしても腐りにくくなって、永くもつんですね。でそういう、なんだろうな、緑が好きで、竹垣もやっぱり自分で竹の林に入って竹を伐採して、たけのこの切り口を嗅いで「ああいいな」と思って作ったりして楽しみながらやってますし、あとはあの四季折々のお花を苑内に植えて、参詣者の方に「あ、素敵なお花ですね」って言われるんですけど、その通り、あなたにそう言わせるために僕は実はやっているんですよって驚いてニヤニヤしながら思いながら「ありがとうございます」ってお答えしています。

仕事を何でするのかっていうのは、前に證大寺でお世話になったコンサルタントの先生がいます、人間はその愛とか、それからお金とか、そういうために仕事をしているんですけど、根本的なものは自分が幸せになるために仕事をしているんだよというお話をされていたんですけど、確かにその通りだなと思って聞いていたんですけど、ある時、證大寺に講師で来られた宮戸道雄先生っていうすごいおじいちゃんの先生なんですけど、その先生の言葉で、人間は食べていかないと、死んでしまう。だけど食べていても死んでしまうよというお話を聞いた時に、あ、すごく奥が深いなど。僕は最初仏教とかお寺っていうのは嫌なイメージで、気持ち悪いなって思って、正直。仕事してい

たんですけど、證大寺の僧侶さんのご法話を聞いて、そうじゃないんだと、何だろな、有り難いなと思う時もありますし、自分がどうしようもない、人を否定してばかりだなと思って、気が付かせてもらうっていう大事なことを教えてもらって、その僕の中で仏教っていうのはすごくとても良いイメージになってきたんです。何で證大寺で働くかってまた考え：今回報恩講で考え直させてもらった時に、ふと思っただのは自分の人生は何だろな、実りのある人生って言いますか、何だろな、幸せももちろんそうですけど実りがあって、色々な人を育てる、そういうのかなあって何か思ったりしました。

まとまらないんですけど、こういう風に考える時間を頂けるといっのはやっぱり證大寺だけだと思っんですよ。他の、会社に勤めていたらこういう時間はまずないと思っんです、皆さんの色々な感話を聞いて、自分の中も何か新しい考え方、見方が出来てとても良いなと思っます。

また三明先生のお話も聞いて、二河白道のお話、僕すごく残ってまして、何だろな、色々その勉強させられる部分もありますし、また、家に帰ってから妻に「今日お坊さんがこんな話を受けたんだよ」ってチラッと時々話す時がありまして、そういうのも今度は子供達が大きくなってきたら少しずつ何かしてあげたいなと思っっております。以上でございます。



法  
話  
Ⅲ

続きまして、ただ今は四人の方から感話をいただきました。ありがとうございました。

今、お話の中にありましたが、證大寺は大変な事をしていてるわけで、すごい事をやっている、という事です。教えを、教えの心を元にして、世の中の人に是非とも触れて頂きたい大事な事柄、誠の道理、そういう事を開いていっておられるという事なんです。そのことについて、職員の皆様方がその意味を少しづつ感じつつあるという事も改めて知らせて頂いたところです。

一般に言われると思うんですけども、学校関係の方ですと、FDとSDという略称で研修の内容の事が言われます。FDとは、ファカルティ・ディベロップメント(Faculty Development)のこと、どういう事かというと、教育内容の教育技術について研修をするということです。このファカルティは、大体学部とかそういう時に使われる言葉です。学問の内容、あるいは教育内容についての研修という方がFDで、スタッフ・ディベロップメント、スタッフというのは、つまりスタッフ、職員ですね。事務処理能力からその様々な業務をこなしていくと、そういう事のための研修、そういうのをSDと申します。学校関係では当たり前に言っているので、一般の企業でも仰るんじゃないかと思えますが、学校関係ですと併せてFSD研修なんているのでやるわけです。

そういう観点から言うと、もし教育、学校関係の専門用語だとすれば、お寺は当てはまらないかというとなんな事なく、それこそ一番大元の教育というのが、行われてきたのはお寺ですから。中世というか江戸時代でも寺子屋なんて言うと、一番庶民に密接な教育が行われたのがお寺だという

事ですし、そもそも遡るとそれこそ奈良時代からして、教育機関、学問機関であるのがお寺であった。そして、そのお寺が今はやはり使命としては社会教育の現場である、そういう事ですから、別にSD研修と言っても間違いじゃないと思うところですよ。まさしくSD研修が行われておると言う具合に私は今日の職員報恩講を感じております。

やはりこうスタッフ、職員の方々一人ひとりが自分の居場所についての意義を見出す、感ずる、そういう事があると、この現場、組織というのは大変生き生きと活性化する訳です。お給料が働く動機というような面が今までであった訳です。実際そのお給料が働く動機ではないと言うわけではないうですけれども、しかしながらただお給料だけ上げられてもかえってひどくこきつわかれるんだつたら嫌だ、と言うような傾向も現代にはあるわけですね。まあ特に皆さん方はもうだいたい大人ですからあてはまりませんが、学生さん方の中には卒業してすぐに就職をしないという人は結構いる訳です。今日的な問題です。自由がいいっていう事ですね。アルバイトでずつつないでいくと。だからお金が無くなれば働くけど、またお金が貯まったらしばらく自分の好きな事をやって、それでまた…というような調子でつないでいくと、フリーターですね。そのような傾向がずいぶん出てきたんですね。それはお給料でつられて、それで役職つけてもらえば管理職手当もついて結構なんだけど、実は責任が重くなり、責められるのもきつくなると。そういう重圧は避けたいというような気持ちの人はお給料を上げると言っても、ダメですね。それで食べていける程度で働く、やっつい

ければいいやと、そういうこともあるわけですが、出来ればやはり仕事に甲斐を見出して、毎日出かけて行って、お家へ帰ると。しばらくの時間、自分の自由と権利を譲り渡して、その分で給料を得るんだとそういうのではなくて、やはり自分自身が幸せにしていくんだと、そういう事がこの一日一日の意義であると。こういう事が本当に望ましく願わしい事だと思いう訳です。今までは綺麗事って言っていたんですが、綺麗事ではなくて、本当に私どもは一人ひとり元気にならなければいけないのですね。何で元気になるかという事ですが、分かりやすいので良く申し上げるのは、デートの話です。あまり乗り気でないデートに遅刻しますしね、それでいて言い訳はするんですね。その点、相手のことを心底好きだと、やっぱり早めに行くんですよね、デートの待ち合わせ場所に。また出来るだけゆつくりしていたいですよね。で、相手の気持ちを聞きたいんですよね。自分が話したいのもあるけれど、それより相手の気持ちを聞きたいですよね、どう思っているのかなと。まあ、そういうのはどうしようもない事ですよ。嫌々やっている人は遅刻します。乗り気でないれば遅刻します。いくら一生懸命やりますと言ってもサボります。黙って見ていればわかりますね。その点、先程の感話で良い言葉がありましたね。人間ウオッチングとかね。本当ですね。黙って見ていればどういふ人か分かってくるっていう、そういう事があるわけです。また、真似するっていうのも結構な事ですよ。良い事は真似しましょう、でもなかなか。悪い事を真似する事が多いのですね。お前がちよろまかすから、俺もちよろまかすとか、お前がサボるから、俺もサボるとか、

そっちの悪い方の真似が多いんですが、そうするとどんどん駄目になっていくわけです。ですから、まあ例えば本当におっしゃる通りで、感話の中にありました通り、一言「ありがとうございます」って言う事、「ありがとうございます」と言うその一言、それを心がけて真似するだけでも大分変わるわけでございます。その点私、私としては個人的な趣味で申し上げるので皆さんには失礼であり、相応しくないかもしれませんが、私はこの度の選挙は期待したのですね、若干。しかし結局、結果はあの政権が交代にもならないし、今までの方針が益々進んでいきそうだという事で、国全体の動きとしては私はあまり良くないんじゃないかなと感じて若干残念なんです。特に教育関係の方は益々このトップダウン式の締め付けが厳しくなってきたりまして、私としてはどうしてもあの学生達が戦地に送り出されるといふ事がないように、ぜひともどうしても止めなきゃいけないと。そっちの方に傾かないようにという事をとにかく思っておるわけですが、これほどの票が政権与党に入ったという事は、それは選挙制度のあの仕組みもありますけれども、でも私は国民の中で少数派なんだろうかなあと、やっぱり自分が変わっているだろうかという具合にも思ってしまったんです。しかし期待すべきは、政治の方だけではありません。やはり、日常生活をしている社会人一人ひとりが意識改革をしていく事こそが本当に国全体、あるいは世界が変わっていくと、明るい方に変わっていくと、いう事にしかないんじゃないかと思うんですね。そういう点で自己自身を省みる、それも人向きにあのすいませんでしたと謝って、自分でそれほど悪いと思って無くても人向きに反省するとかそう

いうのでなくて、『生死と向き合う心構え』などの本にもお書きしましたが、御本尊に向かえば、御本尊は何も言いません。手を合わせてお参りをすれば、何も言いません。「お前久し振りだな」とか「本心ちゃんとお参りしていないだろう」とか、そんな事も何も言わないです。「形だけいつも」とか、そういう事も言わない。言わないけれども、いつも手を合わせてお参りをしておれば、またこのような機会に合掌の意味、意義の確認、手を合わせるといふ事は、喧嘩をしません、右手と左手合わさると喧嘩が出来ません、これが平和といふ事です。その平和な心といふのが大事ですと。こういうことを聞いていれば、手を合わせるとやっぱり落ち着いた心になる。落ち着いた心になれば人向きに向き合っていた自分の関心がどういふわけかこう自分に向かってくるようになる。そうすると、自分自身の事が気付かされてくるというような事があるわけです。

謝罪と感謝と言ふようなそういうお言葉も感話にあつたと思うんですけども、詫びても詫びても取り返すことができない、そういう事に気が付くといふ事こそ謝罪なんじゃないですか。例えばお金、これでひとつ謝罪として出しますといふので、お金で謝罪を表すといふような事はよくこの世の中で行われるわけですが、本当のところはですね、お金で済むような事ではない、といふ事に気がつくのが謝罪なんじゃないでしょうか。だからといって、徹底して責められなきやいけないのかと言ふとそういう事ではありません。私はですね、どういう点に置いて、間違っていたかといふ事をきちんと気が付かせて頂いていくといふこと自体が、謝罪といふ事になるんじゃないかと思

うわけです。ごめんなさい、ごめんなさい、って言いながら同じ事を繰り返すっていうのは謝罪じゃないですからね。どこがどういけなかったのか、という事にきちんと気が付いていくと、でもそれでも分かっちゃいるけどやめられないという事が私共にあったとしましても、それでもどうい点においてよくなかったのかと言う事を、自分自身として、責め立てられるよりも自分自身の内側から気が付いてくるという事になれば、それが十回同じ事を繰り返し返してきたのが、少しずつ、五回、三回、という具合に少なくなるという事があると思うのですね。実は私は、学生時代は酒乱だったんですよ。今もその傾向があると言われるかも知れませんが、とにかく喧嘩っ早かったです。飲むと抑圧されていたものが出て、それでまあ、本当に：茨、茨っていうような感じですよ。棘がどんどん出てくるような、まあ、そういう事で酔ってしまえば、酔った自分と正気の自分は違いますからね。だからどうにもならないものだという具合に思い込んでおったのですが、やはりこうよくよく考えてみれば、どうして酔って暴れるかですね、喧嘩っ早くなるか、それは相手に問題があるんじゃないかって、まさしく自分自身に問題があるんですね。それをいくら酒を飲むと叱られてもそれは直りません。自分自身の内側から、本当によくない事なんだ、自分自身が人を傷つけ、自分自身も傷つく。こういう事が繰り返し繰り返しあるという事は本当に愚かな事なんだと。人の問題でない、自分自身の事なんだと。そのことを内側から：そういう気になってきた事があって、段々と酒乱っていうのが治まって来たんですね。

人に言われたって、その時は「はい」と言いましたも、なかなか直らないものです。つまりそれほど人間性の深さというのは、迷いも深いものです。コンプレックスも深いものなんです。そういう事も、そういうのではないって言うんじゃないで、あるんだと、弱さを抱えている自分なのだと、本当に気が付いたからといって強くなるわけじゃないですよ、しかしながら弱さとか過ちとかを認めていくというようになれば、どういうわけか明るくなるし元気になってくるわけです。まあ大体馬鹿と言われまいと思っているから、馬鹿と言われると腹が立つ訳で、薄々自分は馬鹿だと気が付いているのを言い当てられると余計腹が立つ、だから「ばっかです」ってちゃんとなってしまえば、馬鹿って言われても「ご名答！」ってなるんですけど「ピンポン！」って返事したりなかなかそうはいかないまでも、そういう心の、私共の心のからくりがあります。そういうからくりも人から言われても気が付かない、ですから、本当は自己が自己を省みれば良いんだけど、自己を省みる、自分を省みるって時にどうしてもエゴイズムで自分を省みるから、そうすると嫌な自分、駄目な自分になってしまうのです。だから反省会でますます暗くなるっていう事がある。でもこれが御本尊に手を合わせるとか、お墓に向かって手を合わせるとか、そういう事を通すとどういわけかただエゴイズムで自分に自分で文句つけるという事が変わってくるわけなんです。そういうことでお参りしつつ、あるいはそれを今度は念仏申しながら考えるという事はとても素晴らしい事だと思います。昔の人から今日までずっと行われてきた、そういう意義はとても大きいんじゃないか

と思うわけでありませぬ。

それで、つまりは申し訳ありませんでしたとそういうところに気が付くというところが大事なんです。それ自体は償いとは簡単にはなりません、申し訳ない私をなおこのように、扱って下さって、とか、対応して下さいとありがとうございます。と、そのように思えるようになるんです。謝罪と感謝の謝の字ですからね、繋がっておるわけです。だから感謝感謝と言うけれど、感謝が出て来るのは、俺も感謝するからお前も感謝しろよ、では感謝にならないですよ。だから、何の取り柄も資格もない私というのは極端な言い方かもしれませんが、取るに足らない私をここまで世話して頂いてという時にありがとうございます。ありがとうございましたという具合に出てるのです。だから尊敬もそうですね、感謝と尊敬というキーワードとして頂くのは大変結構な事だと思っておりますが、その感謝と尊敬の出処はって言う謙虚ですね。それは生の自分自身の有様って言う事に気付かせて頂くって事ですね。それが謙虚って言う事だと思えます。そうでないとお礼が出てこないですね。ありがとうございます、ありがとうございますと言うのも口先だけのありがたうだと、俺がありがたうって言っているのにならなくて、返事しないんだって、そういう事もままあるわけなんです。こちらの方はありがとうございます、相手にありがとうございますと言われなくてもこちらはあります。ありがとうございます。そうですね、相手の対応で別に腹を立てる必要もない、という事です。

色々貴重な感話を頂いておりますので、それぞれ皆さん方もお感じの事だろうと思っております。本

当にこういうものの見方、感じ方、考え方というのは、つまりは仏教に触れずにおるとですね、悩みが悩みを生み、とつくに自殺を遂げたでありましょうと、そういう事にもなるじゃないですか。それで自殺出来ない場合は、やけくそになって人を傷付けると。あるいは新幹線でガソリンかぶって火をつけて、それで周りまで巻き込むとかですね、そんな自暴自棄が人も巻き込むと、そんな事も。今の時代の問題だと思います。

それから感話の中でもありましたが、高速道路で他の車に抜かれたとか、そういうので腹立てるとかですね、つまりは全く自己中心的でその自己中心的、エゴイズム、わがまま、勝手、というのがいけないということ聞いた事もない。あるいは聞いたとしても耳を貸さない。自分はどのようなかというのを一遍も省みた事がないようなそう言うような、心の動きからそういう事件が出てくるわけでございます。しかしこれはまた私共も一旦隙があればすぐそうなるわけなんです。そういうところで犯人との共通性っていうのは条件があるかないかだけ、そういう危ういところに私共はおるわけです。ただそれこそ本当に抜かれた時になかなか「どうぞお先に」と言えるかどうか分らないけれども、それでも「この野郎」と思った時に、そう思う心はどういうわけかとちよつとでも気が付かせてもらえよという事です。気が付くという手がかりに、御本尊を安置したりとか、言葉として南無阿弥陀仏と称えるとか、そういうのが手堅い方法ですよと、いう道なのでございます。ともかく仏教っていうのは暗くて嫌なものだと大方の方は思っておるわけですし、それはやっ

ぱりせっかく歴史伝統をもった仏教がありながら、それが多くの皆さんに伝わっていないと、まだ閉じられたままだという事で、本当にこの江戸時代が終わってから一五〇年も経っているのにまだまだ門戸を解放されていないと、そういうところをやっぱり：気付いたところから直していかなければいけないのではないかと思う訳です。

こういう営みについては集まるにしましても、時間を決めて、それで体調が悪くてもやはり集まろうっていう事で集まらないといけないので、大変な事でもあるのですね。それはそうなんです、やはり日常の業務というだけでなくて、こうやって集うて、業務自らの意義をお互いに確かめ合うという事こそ本当に大事な事になる、良い事だと思うわけでございます。遠回りに見えて、能率は上がるんです。つまり今日一日の間にどれくらいの仕事が出るか、どれくらいの収入があるかという事をせこく考えると、一日空いたから大変な事だという具合になるのですが、実はこれは無駄に見えて決して無駄ではないのです。こういう時、日常の業務の意義をお互いに確かめ合う機会こそが必要なわけでありませう。

「お寺？あなたお寺に勤めるの？大丈夫？」なんていうのがこの世の中のお寺に対する印象なんですね。あらあら、若いあなたがなんでお寺なんぞに就職するの、とかそういう事が実は偏見であったんだと、本当に人は必ず死ぬわけでありませうし、その人生最後の時というのに、当たって正し

くものを見る事ができなければ、いたずらに悲しみ、いたずらに苦しむわけですね。また恨むわけです。その悲しみや歎きを抱かれています遺族の方に接して、真の道理に触れていきましよう、というそういうことは皆さん、職員の方々の日常の営みがそういう道を開いているわけで大変大事なわけでございます。ともすると職員は関係ない、僧侶の方でやって下さいとか、それくらいになりがちなところですが、そう言うのではなくて、却って実はそういうお立場上の僧侶っていう具合にもまた一般の社会人は見ますから、そうでない人が当たり前に、そういう事について、「人は死ぬものですよね」とか「悲しみの中に本当に喜びがありますよね」とか、「死ぬというのは別れではなくて実は出会いじゃないですか」とか、そういうような断片的な言葉でもこう仰って頂くというのはまた大きな、遺族にとって力になるわけなんですよね。

分かりにくければ、人助けのお仕事なんだという具合に頂いても良いんじゃないですか。人殺しの仕事より良いでしょう、人助けの仕事の方が。お寺？人助けの仕事ですよ。特に葬儀なんて言ったらオタオタしてしまうのですから。誰もがお手上げです。そういう時に落ち着いて対応され、お世話をされると、大変な、最高のお世話の仕事なんじゃないでしょうか。まあ、そのようにして意義を私共は改めて確かめて参るべきだと思いうわけです。

そこで、『歎異抄』の終わり、真宗聖典の六四一ページを見てみますと、真ん中のところに、「百分が一（ひとつ）」という字がありますね。これは親鸞聖人が仰せられた事、

「百分が一、かたはしばかりをも、おもいいでまいらせて、かきつけそうろうなり。」

と。百あった内のほんの一つでも、思い出して書き付けただけの事でありますと。何故こうやって親鸞聖人の言葉を書き付けたかという、その最後の三行です。

「かなしきかなや、さいわいに念仏しながら、直(じき)に報土に生まれずして、辺地(へんじ)にやどをとらんこと。一室の行者のなかに、信心ことなることなからんために、なくなふをそめてこれをする。なづけて『歎異抄(たんにしょう)』というべし。外見(げけん)あるべからず。」

と、なくなふをそめてこれをするという、泣く泣く筆を染めて記しましたと、涙でこの本を書きましたと、こういうのが『歎異抄』の精神なんですね。何が悲しいのかって言うと、さいわいに念仏しながら、直に報土に生まれずして、辺地にやどをとらんこととそれから、一室の行者のなかに、信心ことなることがあるということ、その事が悲しい事だと。これを応用して申しますと、この證大寺という場所にご縁を頂いて、共に席を並べて、この同僚としておりながらお互いの心が分からずに、またこの自分自身の仕事の意義が分からないで暮らすという事は、それは悲しい事だと。やはりお互いにこの證大寺にご縁があるという事の意義を見出して、それで仲間として勤めて

参りましようと、そういう事になるのではないでしょうか。

感話の中で、證大寺さんの職場がきついとか、辛いとか、そういう事を仰る言葉は無かったように感ずるのですが、人間関係が大変良いとか、今まで苦労は無かった事だというような事、そういうのも本当の事なんでしょうが、現に退職していく人がいるわけですよ。だからと言って、その人の心に綱をつけるわけにいかないけれども、やはりそこにはまだ不徹底だったと言うような面もあったり、誤解もあったり、そういうのもあると思いますけど、やはりこういうような感話の集いなどは今始まったばかりですから、これを大事にして、それで相互に、本当に共にあるんだと、そして共に幸せになっていくんだと、そういう場所として、生きた集いになっていくようにという事が願われる事なんです。実は何も問題がありませんと言うんだつたら却って問題ですから、「やっぱりあの人の顔を見たくないな今日は」とか、そういうのがあってこそ実際の現場なのです。でもそうだからと言って、もう辞めたとかすぐにならずに、やっぱり相談できるような、そういう柔軟な体制、そういうものを築いていくんだと。これは努力もいるし、しかしながら真の道理に基づく集団、お寺だったら、やっぱり問題を抱えながらお互いに聞いていきましよう。それぐらいになってこそ、生きたお寺だという事になっていくと思います。まあともかくも、世界中から注目されているのが證大寺さんですから。それは皆さんお一人お一人も注目されているという事ですから、注目されると辛いという面もあるんだけど、そのところは、大事な事をやっているんだという

事で胸を張って、日々のお仕事を共にしていきたいものだと思います。こういう事が私自身の責務でもあるわけですが、それ全体はやがてご恩返しという事になってくるんだと。ご恩返しに繋がっているんだと、そういう事は確かな事だと思います。今はまだちゃんと感じられなくても、それでもやはり報恩講というものが行われてきたという意義はあるわけです。そういう環境にどっぷり浸かって、それでお互いに成長していくという事もあってよろしいんじゃないでしょうか。時間になりましたので、私は今のお話はここまでとさせていただきます、皆さん班ごとにどうぞ大いに感想を語り合い、またご質問をお出し頂ければありがたいと思います。どうもありがとうございます。



班  
座  
談  
發  
表

## 一班

森林公園昭和浄苑窓口サービス課 佐藤和美

それでは一班の発表をさせて頂きます。「なぜ證大寺で私が働くのか」十四名の方、素晴らしい感話ありがとうございました。また、「歎異精神とサンガ建立」という事で三明先生のご法話ありがとうございました。

一班では大空さん、それから古門顧問を中心に話し合いをしました。現状、社会ではお寺が身近になっていないという事に気が付きました。これは伊藤さんの感話にもあったように、高速道路でちよつと注意された事によって腹を立てて死亡事故に発展してしまつた。それから長瀬さんの感話にあったように、證大寺で働いているのは手を合わせる時間を頂いている。今現状、手を合わせていない社会の現実があります。

私も子供の頃、両親から「ご飯を食べる時はいただきますを言いなさいよ」と、そうしつけられました。でも手を合わせなさいよとは言われなかつたんですね。證大寺に入りました、あるお坊さんが、お線香、お花を求められた方に「ようこそお参り下さいました」と言つて手を合わせていらつしやいました。ある時「和美さん、さつきはありますか」と言つて、私に手を合わせて下さつたんですね。いや、私そんな手を合わせて頂くような事を何かしたつけなと思つたんですけど、人間ウオッチングという言葉があつたように、その方のしている仕草、動作を真似て、いつしか私も手が合わせられるようになりました。

現状、こういったものを打破していく時はどうしたらいいか、一人ひとりが和合衆として一つひとつコツコツと繋がっていく、そして広げていく事が大切なのではないかという事に気が付きました。

では、何に基づいてコツコツやっていくのか。これは道理、法の教えを聞いていく事。そう思いました。教えを聞くにはどうしたらいいか。これはお寺に行って法を聞いていく。それしかないのかな、そしてもっとお寺を身近に感じて頂く、そういう場を作っていかなければいけないのではないかと思いました。

今現在、證大寺は法要プロジェクトの中で法要の在り方を見直しています。船橋の方では既に実践されていて、ご法要が終わった後なかなか涙を流されていて席を立たれない。本当に故人様を偲んでの行動だけれども、次の法要も待っているし困ってしまうわ、という内宮繕さんのお話もありました。

でもそれが本来の姿なんではないかとそうも思いました。證大寺で働く事の意義は、十四名の方皆さん仰っていた感謝と尊敬に溢れた自分に気が付く事、これしかないんじゃないか。そしてありがたく教えを頂いていく事、これが働く意義なのではないかとそう思いました。

一班の質問では「自分も気付き、同時に相手にも気付いてもらうにはどうすれば良いのか」、今日の報恩講の中で、私はキーワードになる一文字はこの「歎」という文字なのではないかと思いまし

た。これが相手の事を思っているから歎く、小池百合子都知事みたいに自分の政策方針と違うから排除しますと、バツサリ切り捨てる事ができない。何故なら相手を思っているから見捨てられない。でも、相手が気付いてくれない。自分の思いを分かってくれない。それを同時に相手にも気付いてもらい、自分も気付くのはどうすれば良いのか。これが一班での三明先生への質問となります。以上になります。

## 二班

江戸川本坊 窓口サービズ課 木原あゆみ

二班では感話と法話を通して、お話を聞いた中で自分の心に残ったフレーズという事でまとめさせて頂きました。感話を頂いて私が感じたのは、皆さん何らかの意味がある大事な仕事をやらせてもらっている感謝というものが、お話の中にあっただかなという風に思えます。ただ、その感話を皆さん文章で一旦起こされて考えられたのではないかと思うのですが、その考える過程を通して自分の中に謙虚さを取り戻した。その取り戻すという事によって感謝が生まれたのではないかなという風に感じました。また、ちよつとこの感話の順番がばらばらなんですけど、三番目に書かせて頂いている事、そもそも報恩講という事についてなんですけれども、仕事をしているという事を通して自分を表現している、自分を表現する事でやりがいを見つかる。そのやりがいを見つけている自分というものが先祖、親先祖が自分に対して願って下さっている事、そうやっていきいきと生きる自

分を親先祖は願ってくれている、そういう自分を持つ事が報恩講ではないかというようなお話がありました。

あと、二番目に書かれている事なんですけれども、対立し合っても、和合衆という事なんですけれども、完全にみんな仲良くというわけにはいかず、人がいればぶつかり合う事もあって、対立し合っても仲間で、仲間たり得るためにはまず願い。願いというものが必要で、それを共有するという事が大事である。願いというのは仏法の教えだったり證大寺で言えば證大寺が行っている様々な取り組みの事ではないかなと。これを共有する事が大事なのではないのかなというようなお話がありました。

あと四番目、これからの事なんですけれども、最後、先生のご法話から頂いたんですけれども、職員の教育ですね。私達がやっている仕事の意味ある非常に稀な仕事であるという事。ここを私達が段々気付き始めているっていうお話があったと思うんですけれども、職員のこういった研修を通して證大寺というものをもっとあげていこうというような、グレードアップに繋げていこうというようなお話がありました。

最後までめますと、證大寺の仕事というのは人助けの仕事である。という風に一言で言ってしまうのではないかと思います。これは先生の方から頂いたお言葉です。

二班からの質問なんですけれども、ご法話の、一番最後のご法話の中であった事なんですけれど

も、弱い自分であったり問題を抱える自分というのは、誰か他から責められるよりも自分の、自らの内側から気付く事で受け止められるという事がお話の中であつたかと思うんですけども、ただそうは言っても言い訳をしてしまう自分、弱い自分というものがいるので、そもそも自分が弱くて事すらも気付いてないかも知れない。そういった人間が自分の内側から気付く事が本当に出来るのかってという事が疑問ですと。

どうやったら弱い自分を受け止められるのでしょうか、という質問がありました。以上でございます。ありがとうございます。

### 三班

船橋昭 和浄苑 窓口サービズ課 久保愛海子

三班の発表になります。よろしく願いいたします。三班はちよつと時間がなくなつてしまひまして、話し合った内容を書き出すことが出来ませんでした。すみません。

まずですね、私達の班は皆さんの感話と三明先生のご法話を頂きまして、一人ずつどういった感想を持っているかというのを話し合いました。その中で皆共通していたのは和合衆についての話でした。サンガとは何か、和合衆とは何のための仲間なのかという話がほとんどだったので、ちよつとその話をさせて頂きたいと思ひます。

和合衆とは私達證大寺で働く職員だけではなくて、お墓持ち様、あとご門徒様、證大寺に関わる

全ての方を含めて和合衆というのだと思います。出た意見からは自分の立ち位置、自分の価値観をいかに持つか。證大寺に対しての恩返しがしたいという事と、あと組織の中で同じ方向を向いていく事。ただしこれは無自覚のままでは勤まらないので、自分の下らないプライドを捨てる事がまずは大切なんではないかと。その無自覚であったという事に今日、気付かされた自分がいたという話がありました。

その和合衆の中でも上からの押し付けがましくなっていないかというのに気付かされて、ただその気付きというのは和合衆の仲間だからこそ気付かされている事があるという事に今日、気付かされたという意見がありました。

残り私の個人の意見なんです、私が證大寺で働く上で、證大寺に貢献をしたいと思っています。それを言うとマネージャーの皆様が日々考えていらっしやる数字の面でも貢献したいと思っていますし、後はその船橋の皆さんにも貢献したいと思っています。特に溝邊浄苑長と船木副浄苑長の力になりたい。お二人に聞かれて答えられない事があると自分の力の無さを痛感します。以前、管理事務所が江戸川にありましたし、私が入職した時、入職したタイミング、ちよっと数ヶ月前に浄縁墓がちょうど建立されて、その後に管理事務所が無くなり、現場に仕事に移行されたりとか、あと新たなお墓として安堵が出来たり、参詣された方の為の手紙処が出来たり、仏教人生大学が設立されたり、他には法要プロジェクトで仏事支援相談員が出来たり、葬儀生前予約が出来たり、色んな

プロジェクト、色んな新しい事がこの二年、三年の間に出来ましたが、その度に私は「あ、また仕事が増える。また仕事が増える」という風に思っていました。ただ最近、私の中で見える景色が変わってきたのがあります。それはその手紙処が出来たり、安堵と出会われて感動されたりとか、浄縁墓と出会われて「浄縁墓に出会って良かった」と仰って下さる方、後は手紙処で手紙を書いてポストに毎日のように手紙が入っているのを見ると、住職が目指してきたもの、證大寺が今まで向かってきた事は間違ってなかったんだっていうのは最近とても実感があります。なので、今までは「また仕事が増える」というだけで内向きだったのが、そのお墓持ちさんのためになってる、證大寺のためになってるっていうのがその現場として目の当たりにしたので、その住職が目指していた事、證大寺がこれから向かっていく方向を今後とも頑張っていきたいと思いました。以上です。

#### 四班

森林公園昭和浄苑 営繕サービズ課 前田康裕

四班では皆さんの感想をそれぞれ伺いまして、よく多く出てきたのがやはり和合衆の事についてでした。今回また三明先生が和合衆について深くご説明して下さってより深く知る事が出来ました。和合衆というのが和合した人々の集まりだったり、和やかに集まる人々の集まりっていう事が大切なんだなという事が分かりました。

それで、以前、三明先生が馴れ合いと和合衆は違うという風にお話をされていた事を思い出しまし

て、それはどうして違うのかと言うと、仏法があるかどうか、聞法しているかによって馴れ合いと合衆は違うという風に改めて学習する事が出来ました。どうしてもここがお寺なのでそういった、こういう自分を振り返る機会がありますので、馴れ合いではなく本当に和合に近付いた事になったと思うんですけど、普通の企業だと揉め事を起こさないようにしたりとかするので、どうしても馴れ合いになってしまおうと思うんですね。ただそれが證大寺では仏法を学んだり、こうやって色々な方々の話を聞く事によつて、そういった和合がちゃんと見えてくるのかなという風に思います。

ですが、聞法をしていたり仏法だけでは和合が出来ず、深く語り合ったりする事によつてより深い願いが成り立つという事で、ただ聞法して仏法聞いて「ああ、それだけでいいや」というわけではなくて、本当にこのようにみんな語り合ったりとか自分自身の事に置き換えて考える事によつて、そういった更に深い考えや願いが成り立つと思います。そしてそれによつて一人ひとりが自分事として考える事によつて気づきがあったり、また社会との繋がりが出て、それが私達證大寺が目指している願いに繋がっていくのではないかなという風な話にまとまりました。以上です。

あとすみません、三明先生に質問なんですけれども、何故、聞法すれば和合衆となり得るのか。馴れ合いにはならないのか。どうしても普通の企業に勤めていると揉め事を起こさないように馴れ合いになってしまうのですけれども、どうして聞法とか仏法を聞く事によつて和合衆となり得るのかなという質問が出ましたので、もし分かるようであればお答え頂きたいなと思います。まとまり

ませんが以上です。

## 五班

船橋昭和浄苑窓口サーピス課 長瀬珠栄

五班の発表をします。五班は溝邊浄苑長と銀田僧侶と今井さんと富田さんと石川さんと大塚さんと私です。感話を通して三明先生がお話して下さったものをまとめて総括とさせて頂きました。

まず「歎異精神とサンガ建立」という今日の報恩講の題で、「サンガ」とは仲間である。我を超えた価値と深い願いで成り立つ。公開された仲間、と受け取りました。「歎異精神」はサンガとサンガの精神に足り得ない自分に歎く、と捉えました。これはサンガというのが我を超えた価値と深い願いとありますが、どうしても我というのがエゴイズムなので自分中心になってしまう。その自分中心にやっぱりなってしまうという精神、サンガの精神が足りていないという自分に気付いて、自分に歎くという事だと思いました。その問題、どうしたらこのサンガが成り立つのかというものに、解答、答えてというのがやっぱり謙虚さだと思えます。先生のお話の中で「感謝と謝罪が、ありがとうとごめんなさいはイコールなんだ」というお話がありました。これは仏様に手を合わせる事やお参りをする事で、安心して自分を教えてもらえる事が出来る。そうすると自然とやっぱり手を合わせる。「ありがとう」とか「ごめんなさい」という気持ちだが、感話にもありましたけれども、自分自身もそういう気持ちが出てくる。一人ひとりがそういうところで出会っていく事が「サンガ」

であるというまとめになりました。

先生への質問は、どうやったらこの「サンガ」というのを広めていけるか、です。以上です。

## 六班

森林公園昭和浄苑 窓口サービス課 山岡恵悟

六班は今回頂きました「歎異精神とサンガ建立」のテーマを元に、皆さんで意見を出し合ってまとめました。

まず「サンガ建立」とは和合衆、「和合衆」とは和やかに集うと。和やかに集うというのは、意見がぶつかったり喧嘩する事があるけれども決して馴れ合う事ではなくて、同じ、例えば目的、目標、志とも言うかも知れません。思って集う大変価値のあるものであり、私達證大寺にとっては「證大寺三つの願い」この大きな志の下に集った仲間達であると。私達はそのサンガに入っているという風に感じました。そしてもう一つは、それでも私達は弱く、人を選び、嫌い、見捨てる人間であると。そうではないという風に、こうして仏教の教えを聞きながら気付くんだけれどもまたすぐで忘れてしまう。そんな事をずっと繰り返しているのが私達人間だと思えます。ただ、この證大寺で仏教の教えに触れる事で、また同じようにこうして集まった仲間達が、今日の感話にもたくさんありましたね。本当に皆さんの感話を聞いてありがたいなと思ったのと、完璧な事を言っている方なんか誰一人いないですね。完璧な人間なんてやっぱりいないんです。そういった人達が集まって、

「ああ、私だけじゃなかったんだ」とね。みんな同じように自分のその弱い部分であったり苦しい部分を、ずっと自分と向き合いながら迷いながらこうして集まって、皆さんのお話を聞きながら、仏教に触れながら「ああ、私はこれでいいんだ」と。「これでしつかりと仏教を聞いていくんだ」という風に気持ちとして思える、そんなところに感謝と尊敬が生まれる。それが和合衆の大きな意義ではないかと、そんな風に今日、三明先生のお話を聞いて感じた次第でございます。

三明先生への質問なんですけれども、この、私達はすぐに忘れてしまう事が常ですけども、和合衆というところでなかなかその、意見がぶつかり喧嘩するというのが一番素晴らしい形ではあるけれども、職場では本当の事を言わずに、それこそどうしても馴れ合いになってしまつてストレスが溜まつてしまう事もあります。そういったところを何とか意見のぶつかり合いと言うか、そういったところに伝える行動や話をもって相手に伝えるためにはどうすれば良いか、というのが私達の質問でございます。以上です。ありがとうございました。

## 七班

総務課 佐藤綾

はい、七班でございます。私達はまず今日どういった話が心に残ったのかという事で、この三点が心に残ったというまず話をさせて頂きました。意義が分からないまま働く事は良くないという事、そして我々の仕事は人助けの仕事であるという事、そしてまたその一人ひとりが元気でなければな

らない。この三点が心に残ったというお話になりました。では、一人ひとりが元気、この「元気」って何なんだろうっていう話になりました、これはこの元気に繋がるのが「意義が分からないまま働く事」これ、このままですと元気にならないという事が一つ。と、またこちら、元気の繋がり、二、「意義ある役目を果たして働く喜び」、これを感じながら働けば、もう元気に繋がるのではないかという風に話し合いました。

そして證大寺の使命を世の中に周知、こちらを目標として、じゃあこのためにこれをしていったら良いんじゃないか、我々が目指すところはまずこれじゃないのかというところで、じゃあこれに至るためにどうしたら良いのかという事ですね、まずこの證大寺の使命を我々一人ひとりが理解しているかどうかという事ですね。これを今日は確認が出来る大切な日だったとは思いますが。そしてこれが、これを忘れないようにですね、こちらは理解しているかどうか、これを継続させるためにはまず「開かれた和合衆を目指す」というところですね。「開かれた和合衆」とは、これ先ほどもお話が頂いたようにですね、和合衆の和が馴れ合いではないという事です。これは仏教に出会う事が和合衆であってですね、頂いたお話にあった中ですね、こちらで働くようになってから過去にお世話になった人に感謝する事が増えたですとか、とりあえずここで働くようになってちよつと変わったと。そういったお話を頂きました。実はもう我々は仏教に出会っているのでは。ただそれに気付いていないだけなのではないかとも思いました。

この仏教に出会うにあたってですね、まずエゴで仏教を聞かないという事も先生に教えて今日頂きました。阿弥陀様に手を合わせ、自分を省みて、そして自分の中に目を向けて目覚める事。これはですね、和合衆を繋がる場所ではないかと思つた次第です。この和合衆ですが、まず内々の職員で和合衆を目指し、そしてこの和を広げて、外へ広げていき、お寺の外のお墓持ちさん、門徒さん、皆さんに和合衆の和を広げていってですね、そしてこの證大寺の使命を世の中に周知していく、このような道筋になったら大変素晴らしいのではないかと、そういった話をさせて頂きました。

こちらを踏まえまして更に先生への質問を考えました。世の中に周知を目指したんですが、世界から既に注目され、更に今後も注目される證大寺と先生に今日仰つて頂きました。であるならば、我々は更にどんな意識改革が必要なのでしょう。そして、我々生きたお寺ではあるんですけども、更に更にもっと元気な生きたお寺であるために、どんな意識改革が必要なのか、是非お伺いしたいと思ひました。以上です。ありがとうございました。

法  
話  
IV

それぞれの班ごとの内容を発表頂いてありがとうございます。また、私に質問もお出し頂いてありがとうございます。

質問として挙げられてないところもあったかなと思いますが、まずは感じたところで申させて頂きたいと思うんですが、例えば一班、自分に気付き、人も気付くのはどうすればいいかっていうのは、自分が気付くしかないんじゃないですかね。全然答えにならないかな。自分に気付くのにどうすればいいかって言うと、自分では自分が気が付かないんで。やっぱり浄土真宗の場合は法話を聞きましょうという事になると思います。

ただ、法を聞く時のポイントは、エゴイズムで聞いていくのでは駄目なんですよね。これは他のところでも出てきたと思いますけど。ではエゴイズムで仏法を聞くというのはどういう事になるか。盗み心で聞くという事ですね。「ああ、良い事聞いた。これでもって相手をやり込めてやろう」と思ったりね。「ああ、良い事聞いた。これ使って俺もまた話してやろう」とかね。そうすると自分で真に受けないようになってしまってますね。だから痛いところは聞かなかいけません。それが自分が自分への真剣勝負という事になってくると思います。これは結構難しいわけなんですよね。だから聞法っていうのは、ただ聞けばいいってわけじゃないですよ。座談も聞法なんですよ。お互いが語り合うのが聞法なんです。だから法を聞くっていうのはただ聞くっていうので矮小化してはいけません。聞くっていうのは自分自身が身に頷くまで聞くっていう事なので。「ああ、分かる話

だね」っていうのでは駄目なんです。ただ、大体は法話の後に拍手しないっていうのは何故かって言うんですね。良い話だったら拍手したいですよ。だから却って不自然な感じなんです。俺の物差しによく合った、だから良い話だっていう拍手はやめましょうという事なんです。そうすると自分が決めてる物差しが壊されるとかいう事になれば、驚きになるし自分が間違っていたんだなって気が付くので、それについて拍手はあまり出ないんじゃないかと。それよりは「ありがとうございまして」とか、あるいはありがとうと言えなくても「そうかなあ」って思うような感じで。だから急には拍手は出ないもんじゃないかという事で、法話の後の拍手はしないようにしましょうという作法になっておるわけです。

今、一斑のご質問に繋げて他の班の事まで申させて頂いたわけですが、一応ですね「自分に気が付き、人も気付くのはどうすれば良いか」というと、そういう法を聞くという事でしょう。法を聞くというのはただ聞くだけじゃないですよ、って事ですね。ポイント稼ぎでもないし盗み心で聞くのでもなくて、自分自身に聞いていかなきゃいけない。それには、聞くっていうのは座談も聞くっていう事だという事なんです。という事で申しました。

そして、話すこと。学ぶことと教えることは別ですよっていうのは一般的なことわざとしてありますよね。だから法を聞くということについても、聞くだけで分かったつもりになっていて、本当に分かっているかどうかはやはり、話し合ってみないと分からないんです。ですから座談まで含ん

でいるんです。あるいは法話をしなきゃいけないというような場合でも、法話すること自体が聞法じゃないといけないんです。「どうだった？良い話だったろ？」とか「良い話しましたよ」とか、そういうのでは駄目なんですね。先代住職が「もう、がっかりする事があるんです」って言われた事があるんですね。せつかく法話に来て頂いたその方がお話が終わった後に、「住職さん、こんな話でどうだったでしょうか」って聞くと、「あー」って言って顔をしかめて言っていましたね。「ああいうのは駄目ですね」って。だって自分の信念を語っていかなきゃいけないのに、「住職さん、どうでした？」とかね。そうするとまた馬鹿な住職がね、「お参りの皆さんも喜んでたから良い話でしたよ」って言ったら最悪ですよ。住職さんっていうのもちゃんと聞かなきゃいけないですよ。一般的に間違い、ありがちなのが、住職がプロモーターみたいになってね「ようし、今度は誰先生呼ぼうか」って言って呼んで、それで今度自分で聞くよりも「みんな聞いてるかな」と後ろの方ばかり気にしている。自分で聞こうとしない。そういうのは間違った聞法なんです。だからまあ、間違った聞法の態度も知らせてもらう事も通して、正しく法を聞くっていう事になればいいですよ。それは間違い無しでは有り得ないんですから。

それから「弱い自分、愚かな自分が内側から気付くと言われたが、どうやったら弱い自分を受け止められるのか」ですよ。これも弱い自分、愚かな自分に気が付くというのは、自分で自分を受け止められる事はないんです。だからこそ親鸞の言葉。親鸞の言葉こそ、最も率直にそういう事を

教えてくれています。「罪悪深重・煩惱熾盛の衆生」とか、「煩惱具足のわれら」とか、「かかるあさましきわれら」とか。そういう言葉は自分自身について言われている言葉が、親鸞自身の率直な気持ちなんですが、それが正直な気持ちだから私どもに響くんですね。そういう形ですから結局、聞法って事なんです。聞法によってしか気が付かないという事だと思えます。

それから第四班は「何故、聞法をすれば和合衆になるのか」っていうような趣旨だったと思うんですけれども。これは発表と矛盾がありますよね。第四班は和合と馴れ合いの違いについてお話になって、聞法じゃなきゃいけないんだと。そういう事を仰ったんですけれども、何故、聞法をすれば和合衆になるかという質問が出てくると発表と質問内容と、私は矛盾があるように感じたんです。つまりはそこに聞法があるのが馴れ合いと違うっていう事だと。だから和合衆を目指していくんだという事になるんですが。何故、聞法すれば和合衆になるかって言うと、つまり自己自身ですね。自分自身の事がはっきりしていくという事において、和合が出来てくるんじゃないかという事です。ただ、サンガとか和合衆っていうのはそう簡単に出来ないんです。これはその後のご発表の中にあったとも思うんですが、第五班ですね。サンガたり得ない自分なんです。そういうところに気が付いていくっていうところがサンガに迫っていくという事で、サンガが出来るっていう事はないと思った方がいいと思います。サンガは極楽浄土なんです。極楽浄土はこの土において簡単には実現できません。だからこそ、ここが浄土だとは言わないわけです。浄土を目指して生きていく

という事が重要な事であります。ここが浄土だって言ってしまったら、腰を下ろしてしまいませんか。でも浄土の光はここに来ているという事はあるでしょう？ですから「歎異精神とサンガ建立」っていう題目になってますが、サンガ建立を目指すところに、そして、そう出来ていないっていうところに歎異というのが出てくるんです。それで、だからこそサンガ建立を目指すという具合になるわけでありまして。いきなり「歎異精神とサンガ建立」っていうのでは、まあ前置きが抜けているって事ですよ。ですから「This is the サンガ」なんて、そんなのは無いって事です。それは錯覚です。それこそ和合でしょう、という事だと思えます。どうやったらサンガを広めていくのかって言ったたら、自分自身がサンガの一員たるべく生きていこうということに出てくるわけで、サンガの一員たるべくあろうというのには、やはり教えを聞くという事になるわけですが、教えを聞く動機ってというのは、そもそも自分は何故この世に産まれたのかと。何が本当の幸せなのか。そういう事があってこそ、聞法っていうのは原動力になるんですね。だから法話の場所に来て、聞く気ない聞き方ってあるじゃないですか。自分の問題になってないという事です。だから物知りになろうと思っしてしきりに知識を仕入れようとする。そういうのでは駄目、サンガたり得ないわけですね。だからまして広めていく事は出来ません。

それから、どうしても馴れ合いになるっていう事ですね。第六班の質問がありますが。馴れ合いになるっていうのはしょうがないですよ。馴れ合いになっちゃいけないって言っても馴れ合いに

なるんですよ。馴れ合いになっちゃいけないって言うのを自意識でやると、お互いに追求し合うようになるでしょう？それはまたつまり肅清とかいわゆる総括っていう事になっちゃうんですよ。だから馴れ合いも良くはないけど、馴れ合いっていうのはあるんだって事です。お互いに大目に見るなんていうのも馴れ合いじゃないですか？でもそれはいいでしょう？大目に見るっていうのは。ただ、「あの時お前がさぼったのを俺許してやったんだから、俺さぼるの許せよ」なんて言うかどうか。どん悪くなるけど、まあまあ、やむを得ないという事はある時はあるわけで。結婚の話言うとおもしろいかも知れませんが、結婚前は両目を開けて、結婚の後は片目を閉じて、そして暮らしていくウインクしちゃって、よく相手の欠点見ないで。結婚した後、両目を開けて相手の欠点見ると、うからこれは上手くないかないですよね。結婚前だったらしっかり良く見て「ああ、こういう欠点あるんだな」良く見て、結婚してしまったらちよつと片目閉じるっていうのは、欠点を粗探しするのではなくて、大目に見てあげるって事です。そういうのが同じこの組織集団の中で、一つの事を目指していくとなったらやっぱりチームワークが大事なんで、それについては場合によってはお互いに間違いが多い者同士なんだから、っていう事ではあんまり追求はしなくてもいい。大目に見てあげるっていうのもあってもよろしいじゃないですか。それは潤滑油になるわけですよ。だからまあ、たまには一緒に一杯飲んで、それで変な事を言ったりとか笑ったりとかですね、そういうの結構な

事じゃないですか。真面目一筋にいけば「あ、誤魔化してる」「それ、ゴマすり駄目」とかって言つて。そんなんじや成り立たないじゃないですか。「今日は綺麗だね」とかくらい言うてやって。脇から「いつもと同じじゃん」と思つても、そういうのも言わないで。「ああ、美容院行ってきたな」くらい、ちゃんと見てた方がいいですよ。「いいね、今日」なんて言つて。まあ、お互いです。「ネクタイが変わったんじゃない？」とか、そういうのもいいじゃないですか、お互いが。それで良いところは褒めたらいいと思うんですね。何も褒めるところがないっていうくらい褒めたいってなつてもいいからですね。そういう事でどうでしょうか。大体お話、ご質問には触れたかなと思うんですが。

あと「世の中に周知させる」ですね。世の中に周知させるのは、それは自分が気が付かないと周知出来ないですよ、結局。だから広報なさるについても、本当に納得しないと広報出来ないじゃないですか。だからそれこそ、何か上からさーつと降りてくるような言葉が出てきて、それで證大寺の広報っていうのを自ずから出来るような、そういう感じがありますなんて言う、そういうのは「御筆先」ですね、まさしく。「私書いているんじゃない、御筆がこう書くようになってる」つて。ただそれはオカルトですかつて言うけど、そうでなくて結構な事です、そういうの。企んであれこれ技法を尽くしてやるよりよっぽどいいじゃないですか。それでそれが自分の思いの外のはたらきという、そういう点で他力と言つても外れてはいないですから。そうやって仰つて頂いて、ことさら三明も叱るわけじゃないですから。大体私、叱らない方でいきたい方なんです。それでも

うひとつこう言うと、他力と言うのが本願力、というのとは親鸞聖人の定義付けですから。そうするとそれは願いのほたらきだと。本当の願いのほたらき。そういうのが他力だと。そういう事になればやっぱり、ご本人が、やはりこの證大寺の願いというのに共感するところがあって、それが自ずから、宣伝、表現、広報に出てくると。こうなればそれは確かな事じやないですか。それが、その気がない人が褒めるっていうのは、本当に底が透けて見えてね、全然駄目なんですよ。だからあの、一般に宣伝費いっぱいかけてもね、流行らない。説得力がないっていうのはどうしてかって、本人がその気になってないでいっぱい宣伝しようとしているからですね。やっぱり自分で旨い物食べたら「旨い」って言って「どうぞ」って言ったら食べるでしょうけど。「旨いんだそうです、どうぞ」とか。食ってもないのに「これ旨いですよ、どうぞ。あ、旨かった？本当？じゃあ私も食べる」じや、毒味にしたな、になるんですね。そういうのはもう、虚しい事ですね。やってる自分自身が虚しいと、そうなってくると思いますから。御筆先みたいな広報が出来るなら大変結構な事だと思います。私が九州大谷短期大学の広報にハントしたいくらいですよ。まあ引き抜きて言って怒られるかも知れないからですね、そういう事で、嬉しい事で感じさせて頂きました。

まあ後どうでしょう。あ、「下らないプライドを捨てる」ですね。ここ、そういう用語、言葉ありますけれども、プライドは大事ですよ。プライドは大事。だから自分を尊ぶ感覚、そういうのは大事。ただ、下らないプライドっていう言葉で言いたいのは、威張る根性でしょうか？威張る根性がある

るやつは見下げるわけです、人を。そういうのは要注意です。ただ、そういう時に下らないプライドっていうよりも、自分を尊ぶ感覚がある人は相手を尊ぶんだと。そっちの方でプライドっていうのを良い方に用いられたらいかがでしょう。威張るな、って言った方がいいんじゃないでしょうかね。威張るな、って事は今度は逆に、見下げるなって事です。それから卑下するなって事です。そういう事を発表をお聞きしながらちよつとメモをしました。

それから「謙虚」ですね。謙虚はなろうと思ってもなれるわけじゃないですよ、これも。大体は下心があつてね、謙虚なフリをするつてのが私ども普段多いんですが、これもやつぱり教えを聞くという事。教えの言葉を我が身に引き当てて考えてみると。そうすると謙虚になってくるんじゃないですかね。そういうのは自ずから出てくるのであつて「さあ、今日からは謙虚になりましょう」つて言つて謙虚ごっこしても無理です。そういうのはもう、私ども大体お互いに分かつてる事ではないでしょうか。

それからまあ仰る通り、新しいプロジェクトが増えると「また仕事が増える」なんて考えてしまうのは、これサラリーマンの正直なところなんですよ。それはやらされている仕事です。それを、やはり創意工夫してやっていくと。こういう仕事はどういう点で新しい企画は意義があるんだと。もうちよつと納得してやつてくれないかというような、説明もやはりちゃんとしなさいといけないですよ。 「上で決まっただからやれよ」つて言うのではうまくいかないと思います。

一応、今の社会はアメリカの制度社会に傾斜して日本もなっておりまして、トップダウンとかガバナンスとか、そういう事をよく言われるようになってるんですが、無理矢理牛耳るっていうのは実は難しいでしょう。人情を持って生きているんですから。だからやっぱりその気になるような事にならないといけない。それについては「どうして俺の事分かってくれないんだ」と、上司がただ怒ってもいけないわけですから。どういう気持かなって、それこそウオッチングですね。そのウオッチングを今度は我が身にも引き当てて、それで考えてみると。大体、難しい話ですが、上司というのは部下がサラ金からローンを借りてるといのでおかしいぞって分かるくらいでない上司じゃないんだって言うのが日本社会だったんですよ。そういうのは古いと言わずに、やっぱりそういう事じゃないですか。上司と部下という言い方もおかしいかも知れませんが、スタッフが何か家の中で問題抱えてるなっていうのくらい、やっぱり感じるようなスタッフにならないと。まあそういう生きた人間関係になれば、それは冷酷なる組織でなくて、サンガに近付いていってるんだという具合になると思います。サンガそのものたり得てはいないっていうのはあくまで確認が必要だと思います。

「開かれたサンガってどういう事か」って言うと、やっぱり、「どなたもいらっしやい」なんです。どなたも教えを聞きにいらっしやいって、そういう事でございます。どなたもいらっしやいって言って、ただ飲み食いだけに来てもらうっていうのでは、それもまあ随分気前はいいですけどね。

それよりもやっぱり、私は教えを聞いていこうとか、人生を語り合おうとか、そういう点で重荷を背負って辛い思いをしている人は一緒に来て下さいと言って。そういうのではバイブルの言葉にもあるくらいですね。キリスト教でも言うくらいなんです。だからそういう点で、一緒にどなたもいらっしゃいという事でいかがでしょうか。開かれていくというのはそういう事。それには自分自身の閉鎖性を開いていくという事が必要なんです。

そういう趣旨で、ともかくもこのような形で御本尊の前でこう語り合おうと。そういうような機会というのは非常に大事であり素晴らしい事だと思うので、今日は皆さんにお会いできてお礼を申し上げたいと思うわけでございます。まず一通りお話をさせて頂きました。

## 大坊守挨拶

本日は職員報恩講お勤め有難うございました

三明先生にはご教導を賜りまして深く感謝申し上げます

私の現時点での仏法の受け留めを話したいと思います

私達が目指す職場は在るべき姿を仏法に聴いて歩みを進めている事です自分一人では気付く事も磨かれる事も出来ませんが職場に居ながらにして仏法の教えにふれる場となっています仏法の教えが職場全体に響くように願いを持ち其々が主体的に聴いて参ります

異なることを歎くのは他でもなく自分自身が一番歎かざるべき存在であったと自覚出来た時自身事として聴こえて参ります自分を生きる事が難儀だとも知らず悩み苦しみ不平不満の時を過ごした真実を知らないばかりに迷い続けて来た事に気づきの時仏法の教え響いて参ります救われる縁も手掛かりもないこの私を進むべき方向へ導いて下さる教え只々感謝し帰依致します

人として生まれ人となる為の教えは凝り固まった自分の思い計らいを超え仏法に聴いて参りたく

願っていますとどまると澁み固めると折れる道理の教えを柔軟に受け容れられるよう精進して参ります。苦しみが外から来ると思っている間は苦しみが無くならない私が私に成る為鍛えて頂ける仏法の教えは自分自身との闘いでも有ります。新鮮に生き生きと歩んで参りたく、思っています。

念仏に依って助けたいと願っている阿弥陀仏十方衆生よと言う呼びかけの本願が私の事として受け止める一人になるため仏法聴聞して参ります。

本日は学びの時間を頂けた事に感謝申し上げます。

毎朝唱和しております。感謝と尊敬に溢れた自分に目覚めるためまた安心して自分をお任せ出来るように成る為生涯開法して参ります。本日は有難うございました。南無阿弥陀仏。

お  
わ  
り  
に

今年の職員報恩講の講題は、講師の三明智彰先生と相談をして「サンガ建立と歎異精神」とした。三明智彰先生は、蓮如上人の真宗再興の精神は『歎異抄』にあることを、吉崎布教の基本精神として掲げられた『御文』（第一帖目第一通・本冊子所収）を通して明らかにされた。

證大寺には、現在、東京（江戸川・銀座）・千葉（船橋）・埼玉（東松山）の四拠点にて勤める職員がいる。

さまざまな価値観や異なる背景や考え方を持つ人々が、證大寺の事業目的である「感謝と尊敬」を大切にして仕事をするには「サンガ建立と歎異の精神」に繰り返し学び、真宗再興の願いに学ぶことが必要である。

お寺は「生まれた意義や生きる喜びを見つけること」を教える場である。證大寺という職場が収入を得るだけの場でなく、文字どおり「生まれた意義や生きる喜び」を見つける場所となったときに、本当の報恩講を迎えることができる。

最後に、三明智彰先生が学長をされている九州大谷短期大学では、親鸞聖人ご命日法要を毎月行い「勤行・法話・感話」を通して大学の理念を確かめている。そして毎月のご命日勤行の集大成としての大学主催の報恩講が開催されている。

九州大谷短期大学に学び、證大寺も職員報恩講を終えた十二月から各現場（江戸川・森林公園・船橋・管理事務所）にて、職員法座を開催している。職員法座では、毎回パートナー職員が感話を

行い、感話を受けての座談、法話を開催している。次の職員報恩講は、毎月の職員法座の集大成となるような歩みを進めて参りたい。

證大寺 住職 井上城治

平成二十九年度證大寺職員報恩講

— サンガ建立と歎異精神 —

法話 三明 智彰 師

二〇一八年一〇月二十五日 発行

編集・発行 (※文言はすべて證大寺にあります)

宗教法人 證大寺

〒一三四—〇〇〇三

東京都江戸川区春江町四—二三—一

電話 〇三—三六五三—四四九九

印刷所

ニッセイエプロ株式会社

〒一〇五—〇〇〇三

東京都港区西新橋一—一八—一七

明産西新橋ビル六階